

正覚寺跡
発掘調査報告書

2019年11月

株式会社 地域文化財研究所

例 言

1. 本書は、伏見区深草正覚町7-3、32-8の各一部において、第一交通産業株式会社が計画された集合住宅建設工事に伴い、株式会社地域文化財研究所が同社より委託を受け実施した発掘調査の報告書である。（京都市番号：18S706）
2. 上記の調査は、集合住宅建設範囲の内、280.8 m²を対象として平成31年4月3日から令和元年6月6日まで現地調査を行った後、株式会社地域文化財研究所京都支所において整理作業を実施した。
本遺跡の現地調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の検査・指導と、検証委員会の学識経験者として龍谷大学文学部歴史学科教授 國下多美樹氏、近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授 網伸也氏により調査指導をいただいた。
3. 上記事業に関する発掘調査担当者は福永信雄、市田英介、松田直子、江崎周二郎、須藤歩である。
本書の執筆は、福永の指導のもと、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの土器・瓦、Ⅳを市田、Ⅲの石器を影山美智与が行った。編集は江崎が行った。「図27 建物復元案」は、網伸也氏にご指導をいただいた。
4. 本書掲載の遺物整理作業は、松田、須藤、宮原温美、阪田恭子が行った。
5. 現地作業、測量については株式会社島田組に協力を得た。本報告書作成に際し、下記の方々にご指導、助言をいただいた。記して謝意を表します。
國下多美樹、網伸也、馬瀬智光、奥井智子、黒須亜希子、鈴木久史、新田和央（敬称省略・順不同）

目 次

Ⅰ はじめに	1
Ⅱ 遺構	3
Ⅲ 遺物	15
Ⅳ まとめ	22
図版	27

I はじめに

1. 調査に至る経過

対象地は伏見区深草正覚町7-3、32-8の各一部に所在する。大阪国税局深草寮が建設されていた場所で、この寮の建設、改築に伴い昭和53、54年度に発掘調査が行われた。この調査で、平安時代後期から鎌倉時代と江戸時代の遺構が検出された。平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、礎石建物2棟とこれに伴う雨落ち溝や排水溝、柵など、江戸時代の遺構は、墓壇群4基以上と建物、溝など寺院に関する遺構が確認されている。

当地におけるマンション建設に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課）により試掘調査（18S706）が行われた。その結果、GL-1.6～1.9mの深度において暗オリーブ色砂質シルトの地山を確認し、この上面で石列、柱穴、溝を検出した。このためマンション建設範囲の内、遺構が保護されず破壊される部分を対象として発掘調査の実施が指導された。調査は開発者、第一交通産業株式会社から依頼をうけ株式会社地域文化財研究所が実施した。

2. 位置と環境（図1）

調査地は京都盆地南東部の鴨川左岸から約800m、東山麓の西側、稻荷山の北西麓の丘陵上の、標高41.6m前後に位置する。東福寺の南方にあたる。現在は市街地であるが、明治20年頃（図2）は、茶畑が広がっていた地域である。

以下、時代毎の稻荷山北西麓域の概要を記す。北域には法性寺跡が所在し、この南西部で行われた

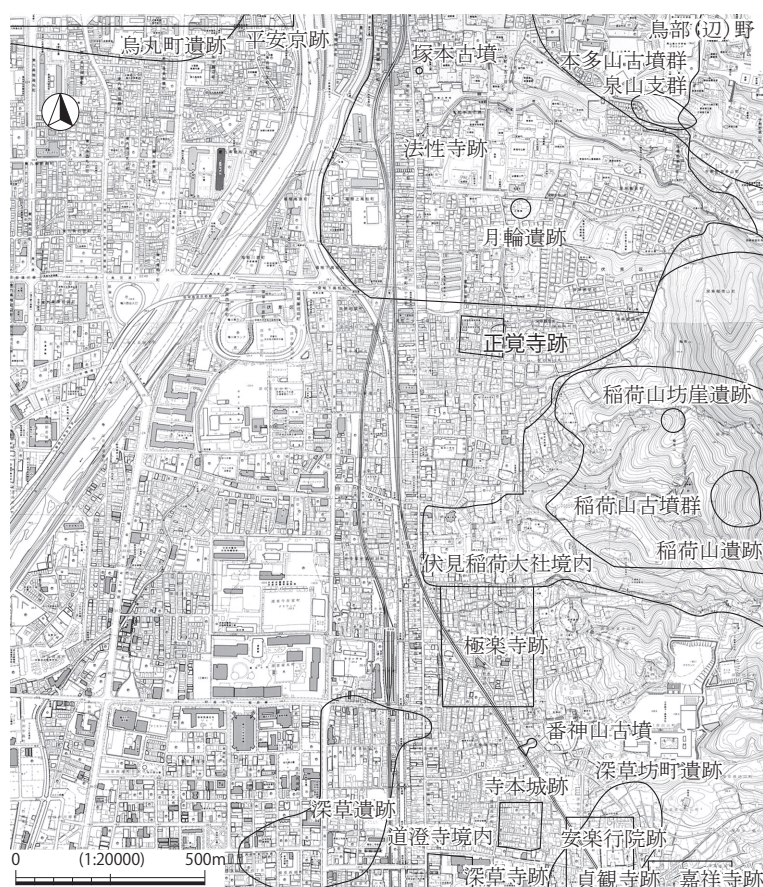


図1 周辺遺跡分布図

調査では、弥生時代前期の溝や中期の方形周溝墓が確認されている。また、弥生時代中期から後期の遺物が、西域で出土しており、この周辺で弥生時代をとおして人々の生活痕跡が認められる。古墳時代には、稲荷山山頂から西麓に20基以上の前期から後期の古墳が築かれる。北西部で平成22年度に行われた調査では、古墳時代後期の竪穴住居が検出され集落の存在が確認されている。奈良時代には、稲荷山に秦氏より稲荷大社のはじまりとされる社が建てられたと伝えられる。平安時代になると北域で法性寺が藤原忠平により延長3年（925年）に創建される。この時期、南方の稲荷山南西域でも、文徳天皇が父仁明天皇の菩提寺として

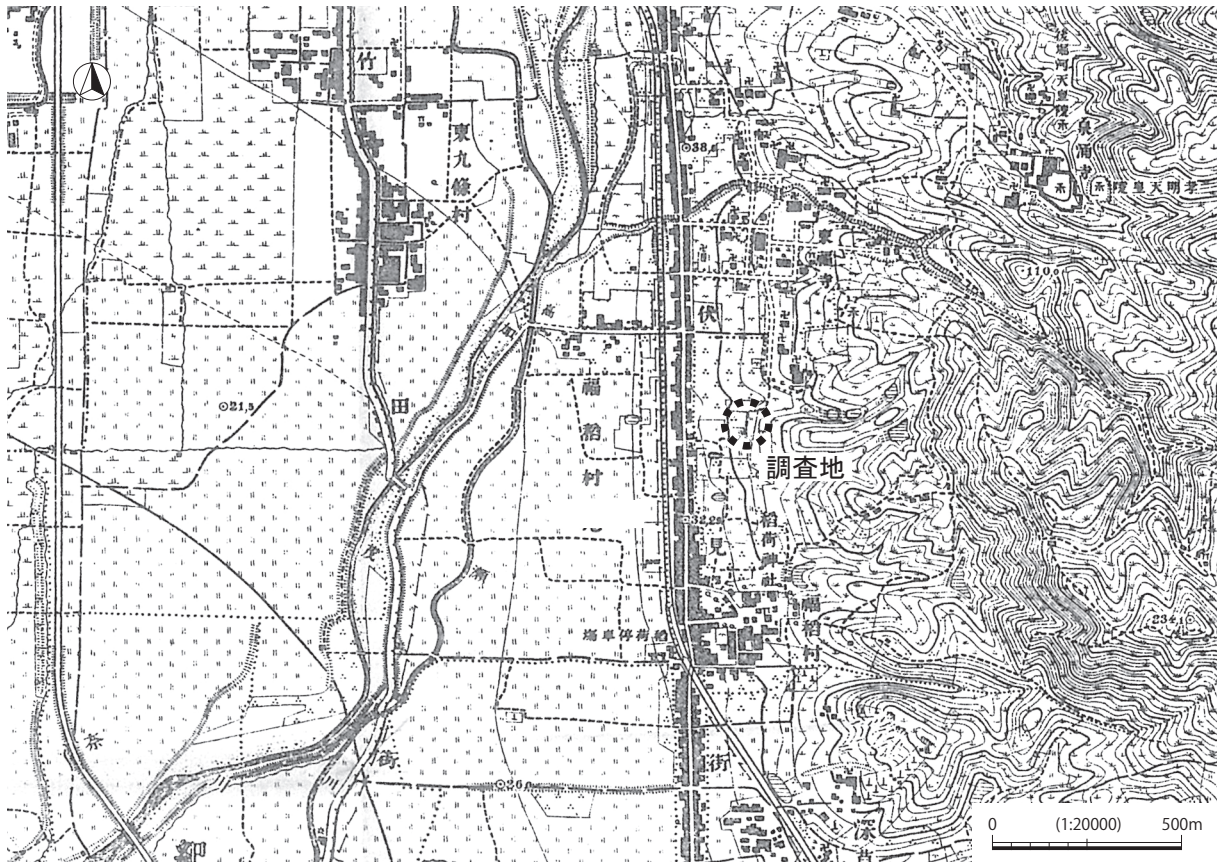


図2 地形図（「京阪地方仮製2万分1地形図」）



図3 調査位置図

嘉祥寺を建立したのち、この近隣に貞観寺、極楽寺や道澄寺が藤原氏によって建立されている。鎌倉時代には、法性寺域に九条道家により東福寺の造営が延応元年（1239年）に開始される。平安時代末から中世にかけては、東山丘陵裾を南北方向に延びる伏見街道沿い付近に街並みが形成され、この集落に係ると考えられる遺構、遺物が西域で確認されている。

3. 調査経過（図3・4）

調査範囲は、対象地南部分に設定

した東西方向に長いトレンチ2箇所である。北が4.3m×36m、南が3.5m×36mである。北のトレンチを1区、南のトレンチを2区と仮称した。確認調査にもとづき、機械掘削により約G.L.-1.6～-1.9mまで盛土を除去し、約T.P.=39.7mの地山上面で遺構を検出した。調査前、遺構検出、各時期の遺構完掘時に文化財保護課による随時検査、指導を受けた。また、検証委員である龍谷大学文学部歴史学科教授 國下多美樹氏、近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授 網伸也氏に調査指導をいただいた。

調査は平成31年4月3日から開始し、令和元年6月6日に終了した。調査経過の月日等を記す。

4月3日（水）調査範囲設定、機械掘削開始。文化財保護課臨検。4月19日（金）機械掘削終了、遺構検出。4月23日（火）遺構検出。網氏指導。4月24日（水）遺構検出写真撮影。文化財保護課臨検。國下氏指導。5月22日（水）遺構掘削。國下氏指導。5月23日（木）遺構掘削。網氏指導。5月24日（金）遺構完掘撮影のための清掃。文化財保護課臨検。5月27日（月）遺構完掘写真撮影、測量。5月30日（木）2区柱穴位置の検討。國下氏指導。6月3日（月）2区整地土を除去後、方形の土坑状遺構(022)完掘。遺構掘削作業終了。文化財保護課臨検。國下氏、網氏指導。6月6日（木）調査終了。

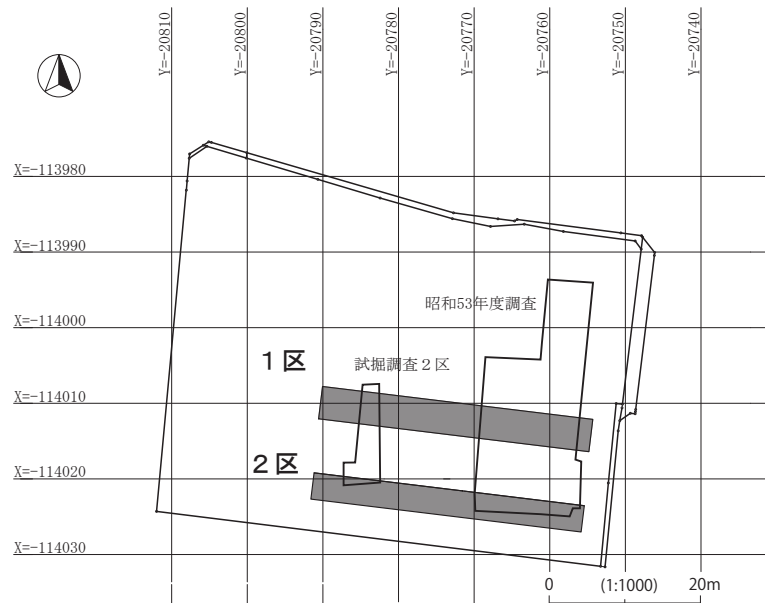


図4 トレンチ配置図

II 遺構

1. 基本層序（図5～7、図版2）

- 1層 現代の盛土、及び攪乱。
- 2層 旧耕土 2区西側の一部に残存する。層厚約0.2m。
- 3層 旧表土 1区西端に残存する。10YR4/2にぶい黄褐色細砂混りシルト。層厚約0.15m。
- 4層 整地土 1区東端、2区西側で確認した。いずれの整地土も硬くしまる。1区東端の整地土(4-1)は、厚さ約0.05mで異なる土が版築状に重なる。この整地は同位置に溝(015、016)を造るための造成と考えられる。2区西側の整地土(4-2)は10YR5/6黄褐色中～粗砂混りシルト直径0.5cm大の礫と10YR3/2黒褐色シルトブロックを含む。西側

約 10m の範囲で行われている。厚さ 0.1～0.2m で西に向かって厚くなる。この上面で建物の礎石据え付け穴 (018、020、021) を検出した。2 区西側に建物を建てる際に平坦にするための造成と考えられる。

5 層 地山 1、2 区の東端で確認した。10YR8/4 浅黄橙色細砂混り粘土質シルト。

6 層 地山 1、2 区の西端で確認した。5Y5/2 暗オリーブ色シルトで、上面に流水による礫が多く混じる。

2. 遺構 (図 8～10)

室町時代 (15 世紀) 以降と平安時代後期 (12 世紀) の遺構を確認した。室町時代以降は、ピット 2 基、土坑 1 基、溝 5 条、落込み 1 基、方形の土坑状遺構 1 基、平安時代後期はピット 7 基、溝 3 条、方形の土坑状遺構 1 基である。以下概要を時代毎に記す。

室町時代 (15 世紀) 以降 (図 11・12、図版 3・4)

SD001 1 区西端で北肩を検出した。東西方向に延びる溝で幅 1.1m 以上、深さ 0.1m。埋土は 7.5Y4/1 灰色中～粗砂混りシルトで直径 2～4 cm 大の礫が混じる。埋土内から瓦の細片が出土した。確認調査の 2 区でこの溝の延長部が確認されており、推定幅は 2.4m である。

SK002 1 区西端で検出した土坑である。SD001 と重複し切られる。直径 1.0m、深さ 0.38m。埋土は 5Y4/1 灰色細～中砂混りシルトで炭化物、地山ブロックを少量含む。埋土内から瓦の細片が出土した。

SD003 2 区南西端で検出した。SX006 を切る。東西方向に延び、南北方向にほぼ直角に分岐する溝である。幅 0.6m 以上、深さ 0.05m。埋土は 10YR4/1 褐灰色中～粗砂混りシルトで直径 1 cm 大の礫、炭化物を少量含む。埋土内から瓦の細片が出土した。

SD004 1 区の南で北肩を検出した。SD001 に切られる。東西方向に延びる溝で、幅 0.5m 以上、深さ 0.22m。埋土は上層 10YR5/1 褐灰色細～中砂混りシルトと下層 10Y4/1 灰色粗砂混りシルトの 2 層に分かれる。埋土内から白磁、陶器、瓦の細片が出土した。昭和 53 年度調査で確認された溝の延長部であり、幅は 2.2m と考えられる。

SD005 2 区東端で検出した。コの字状に曲がる溝で、幅 0.6～0.8m、深さ 0.25m。埋土上層は 7.5Y5/1 灰色シルト質粘土に炭化物が少量混じる。下層は 10YR5/1 灰色細砂混りシルト質粘土である。堆積状況から、開放された状況で滞水しながら埋没したものと思われる。埋土上層内から廃棄された瓦の細片と礫が多く出土した。北から南にかけては皿状の断面形が明瞭に確認出来たが、南部分の東西方向では、ほぼ平坦となり立ち上がりは確認できなかった。

SX006 2 区西側の整地土上面で検出した落込みである。南から北へ向かって低く傾斜する南肩を確認した。東端は北へ屈曲する。底面はわずかに段差があり低くなる。東西幅は 11m 以上、深さ 0.15m。埋土上層は 10YR4/2 灰黄褐色中～粗砂混りシルトで直径 1～4 cm 大の礫と炭化物が少量混じる。下層は 10YR4/2 灰

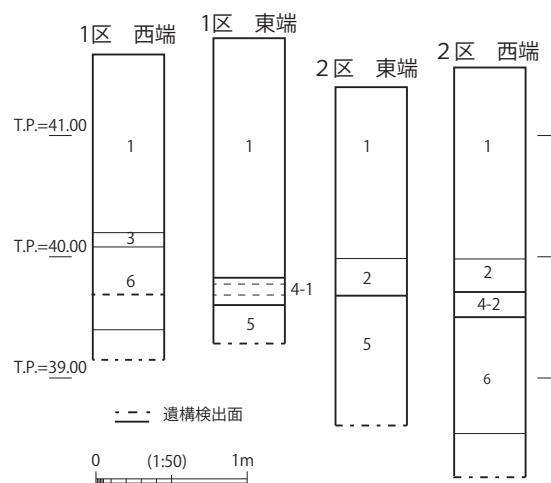
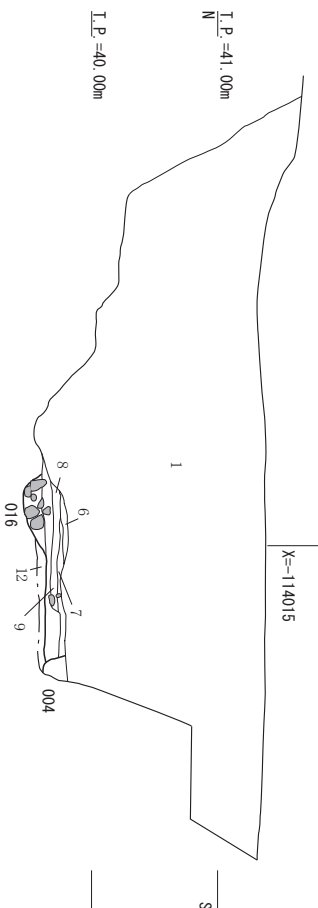
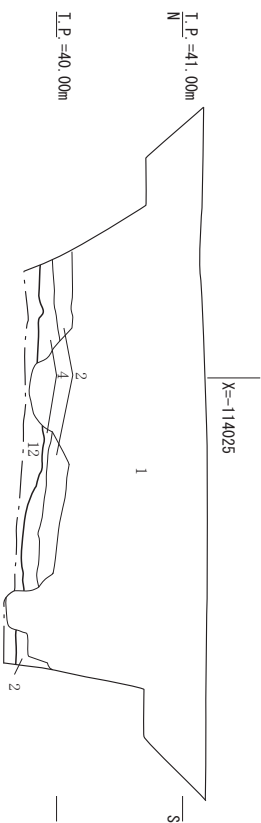


図 5 土層柱状図

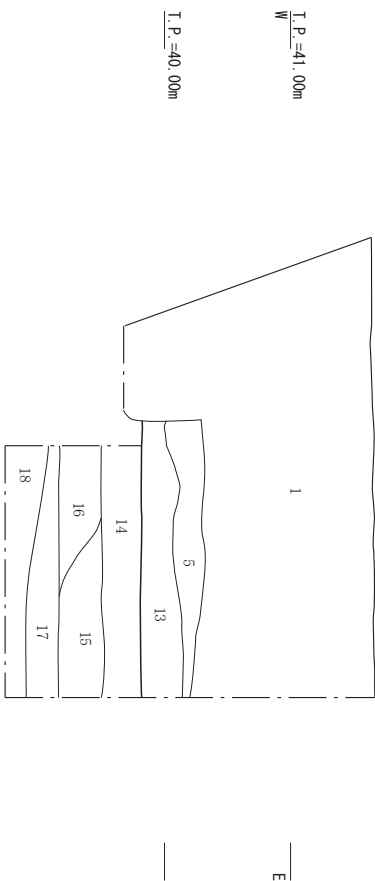
1 区東壁土層断面



2 区東壁土層断面



2 区北壁 (西端) 土層断面



1. 現代の盛土、及び攪乱。(1層)
 2. 旧耕土1 (2層)
 3. 10YR5/8黄褐色粗砂混りシルト φ 1~3cm大の礫混じる。
 4. 旧耕土2 (2層)
 5. 旧表土 10YR4/2こぶい黄褐色細砂混りシルト。(3層)
 6. 整地土 10YR7/1灰色中〜粗砂混りシルト φ 0.3~0.5cm大の礫多く混じる。(4-1層)
 7. 整地土 2. 5Y5/1黄灰色細砂混りシルト。(4-1層)
 8. 整地土 7. 5Y6/8橙褐色中〜中砂混りシルト φ 0.5cm大の礫少量混じる。(4-1層)
 9. 整地土 10Y5/6黄褐色粗砂混りシルト φ 0.3~0.5cm大の礫多く混じる。(4-1層)
 10. 10YR5/2灰黄褐色中〜粗砂混りシルト φ 0.3cm大の礫多く混じる。
 11. 整地土 10YR5/6黄褐色中〜粗砂混りシルト
φ 0.5cm大の礫と10YR3/2黒褐色シルトフロックを含む。(4-2層)
 12. 地山 10YR8/4浅黄橙色細砂混り粘土質シルト。(5層)
 13. 地山 5Y5/2暗オリーブ色細〜中砂混りシルト。
 14. 地山 5Y5/2暗オリーブ色シルト。(6層)
 15. 7. 5GY6/1緑灰色細砂混りシルト。
 16. 10YR4/2灰黄褐色細〜中礫。
 17. 10YR5/8黄褐色シルト。
 18. 10GY6/1緑灰色細〜中砂混りシルト φ 3~5cm大の礫多い。
- 003 1. 10YR4/1褐灰色中〜粗砂混りシルトでφ 1cm大の礫、炭化物を少量含む。
 - 004 1. 10YR5/1褐灰色細〜中砂混りシルト。
2. 10Y4/1灰色粗砂混りシルト。
-1. 7. 5Y5/1灰色シルト質粘土に炭化物が少量混じる。
 - 005 -2. 10YR5/1灰色細砂混りシルト質粘土。
 - 009 1. 2. 5Y6/4にぶい黄色中〜粗砂混りシルトでφ 0.3~0.5cm大の礫が混じる。
 - 016 1. 2. 5Y5/1黄灰色細砂混りシルト。

図 6 1、2 区東壁断面図

2区南壁土层断面

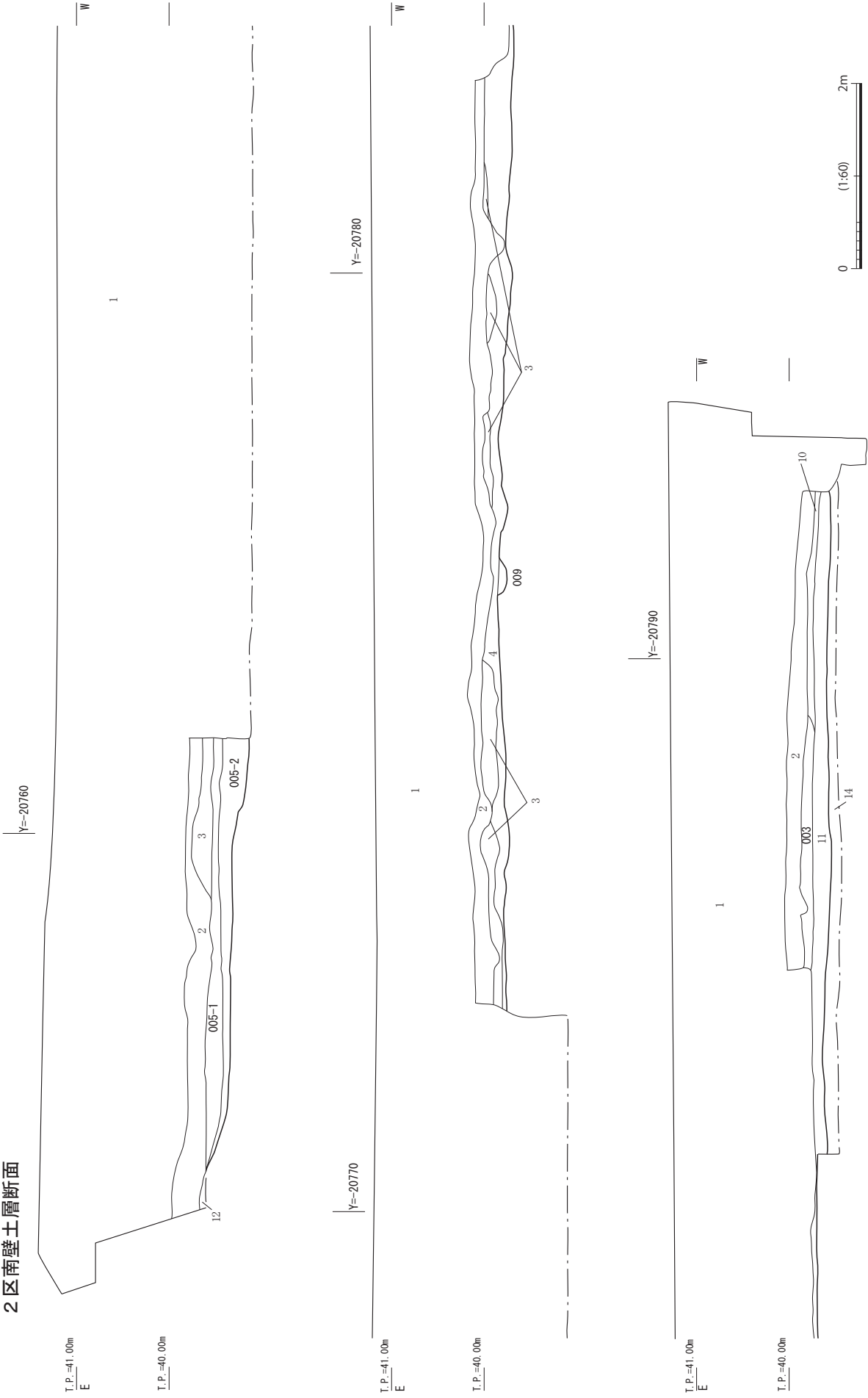


图7 2区南壁断面图

黄褐色粗砂混りシルトである。埋土内から灰釉陶器、瓦、壁材などの細片が出土した。この落込みの底面の段差は、東西方向に直線的に延び、この東延長部が昭和53年度調査の雨落ち溝南辺とほぼ一致することから、建物に係る痕跡の可能性はある。

SP007 2区東端で検出した。SD005に切られる。直径0.2m、深さ0.15m。埋土は2.5Y3/1黒褐色粗砂混りシルトである。

SP008 2区東端のSD005西で検出した。直径0.2m以上、深さ0.28m。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色中～粗砂混りシルトである。埋土内から瓦の細片が出土した。

SD009 2区中央付近で検出した。南北方向に延びる溝である。幅0.4m、深さ0.1m。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色中～粗砂混りシルトで直径0.3～0.5cm大の礫が混じる。埋土内から瓦の細片が出土した。

SX010 1区南西端で検出した方形の土坑状遺構である。SD004に切られる。北肩を検出し南方へ延びる。埋土は7.5Y5/1灰色細～中砂混りシルトである。東西幅3.5m以上、南北幅0.4m以上で東端は南へほぼ直角に曲がる。深さは0.1～0.15m。北側面は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、幅0.35m、深さ0.06mで南方向に延びる窪みが0.7mの間隔で4基並ぶ。この窪み2基では平瓦の凸面を上にした状態、1基では礫が置かれた状態が確認された。南方へ向かって方形状を呈すると推定される平面形と、壁が垂直に立ち上がり、この際に等間隔で並ぶ窪みをもつ形状は、中世から近世にかけて検出されている地下式倉庫と類似している。検出した瓦、礫は根太をうけるための礎石として利用されたもので、SX010は地下式倉庫と考えられる。礎石として用いられた平瓦には布目がのこる。遺物は出土していないが、SD004に切られるため、15世紀をさかのぼる時代の遺構と思われる。

平安時代後期(12世紀)(図14～17、図版4・5)

SP011～013 2区西端で検出した。SX006に切られる。直径は0.3～0.35m、深さ0.2～0.25m。埋土上層は2.5Y5/2暗灰黄色細砂混りシルトで粗砂、2.5Y3/1黒褐色シルトブロックが少量混じる。下層は2.5Y3/2黒褐色中～粗砂混りシルトである。埋土内から瓦とSP012内から12世紀代の土師器皿が出土した。SP011とSP013の距離は約3.0m(10尺)で、東にやや傾く。建物の柱穴の可能性が考えられる。検出位置から昭和53年度調査で検出された建物に伴うものではない。

SD014 1区東端では、重複関係をもつ溝を3条検出した。溝の北は、自然地形の段差があり標高が約0.6m高くなる。この裾に後述するSD014～016が位置し、整地を繰り返して形成されている。

SD014は東西方向に延びる。幅約0.4m、深さ0.28m。両肩は、平らな面を上面にした礫を据え置き、流水による肩部の浸食を保護している。南肩は掘方が確認できたが、北肩部には認められなかった。北肩の礫の直下には埋土の砂が堆積しており、隣接する北の攪乱によってずれた状態であると考えられる。底面はしまりのある10YR7/6明黄褐色細砂混り粘土に直径5～10cmの礫を混ぜたものを貼り、安定させていた。埋土は単一の2.5Y7/4浅黄色細～中砂で充填される。上面ではこの砂がオーバーフローした状況も認められたことから、一度の流水により埋没したと考えられる。砂層内から平安時代後期の瓦、底面の粘土内から瓦の細片と混入品である須恵器の細片が出土した。

SD015 同一レベル上で直径5～10cmの礫が散乱する状況を検出した。残存する礫の配列から東西方向に延びていたものと考えられる。幅約0.6m、深さ0.02m。埋土は2.5Y5/1黄灰色細砂混りシルト

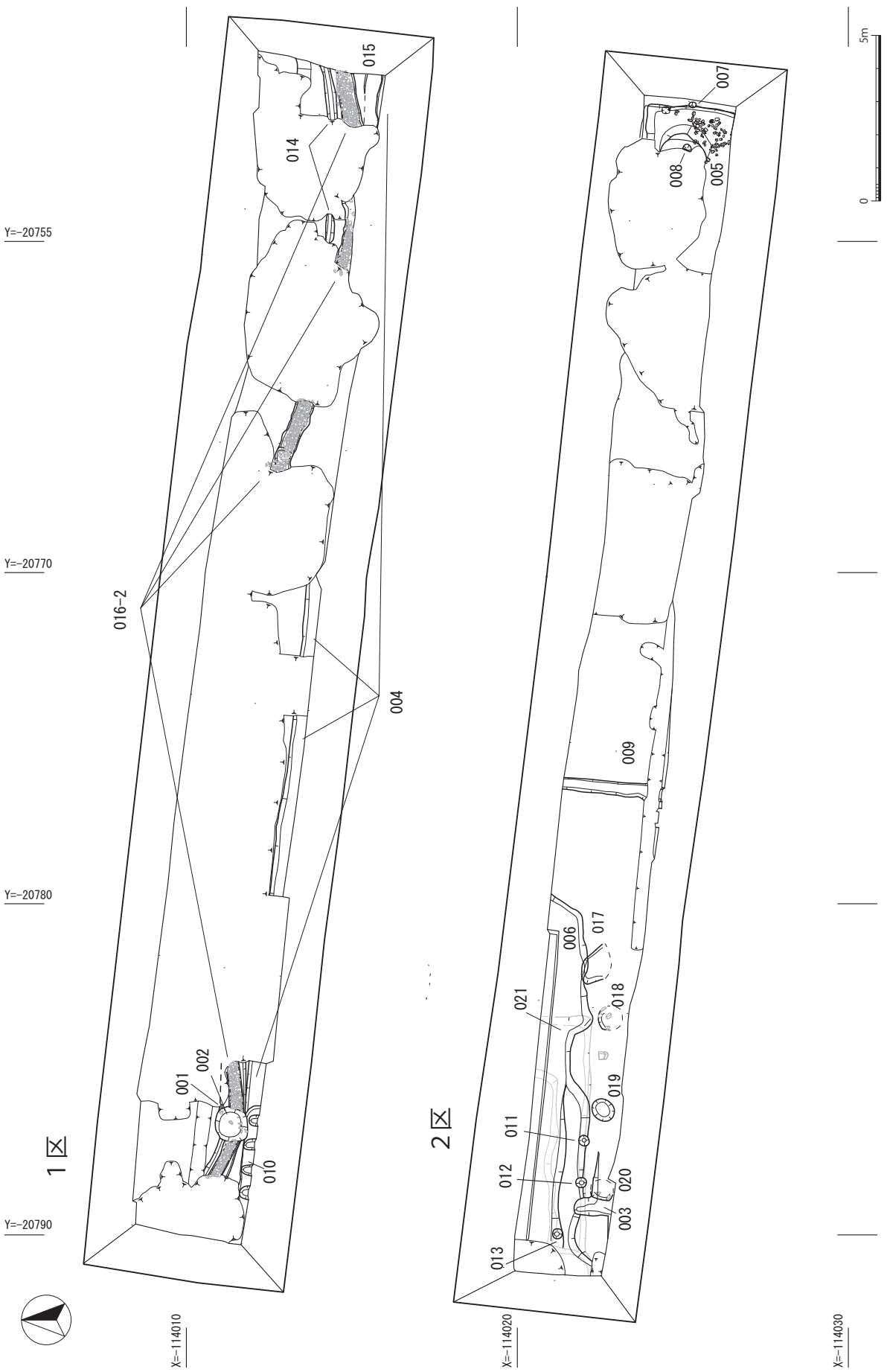
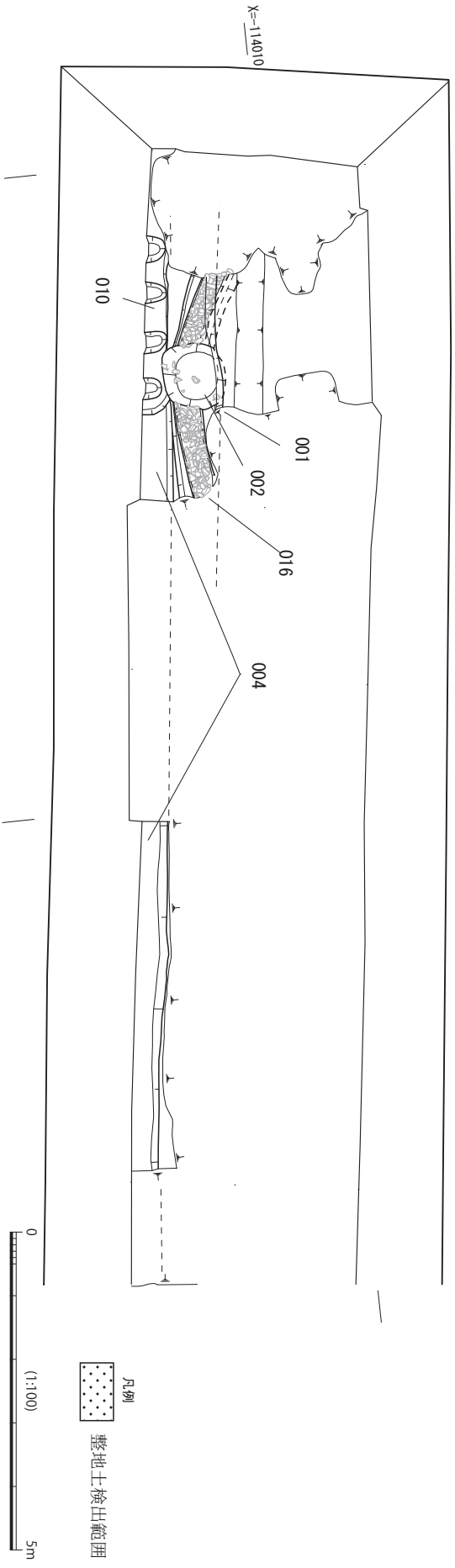
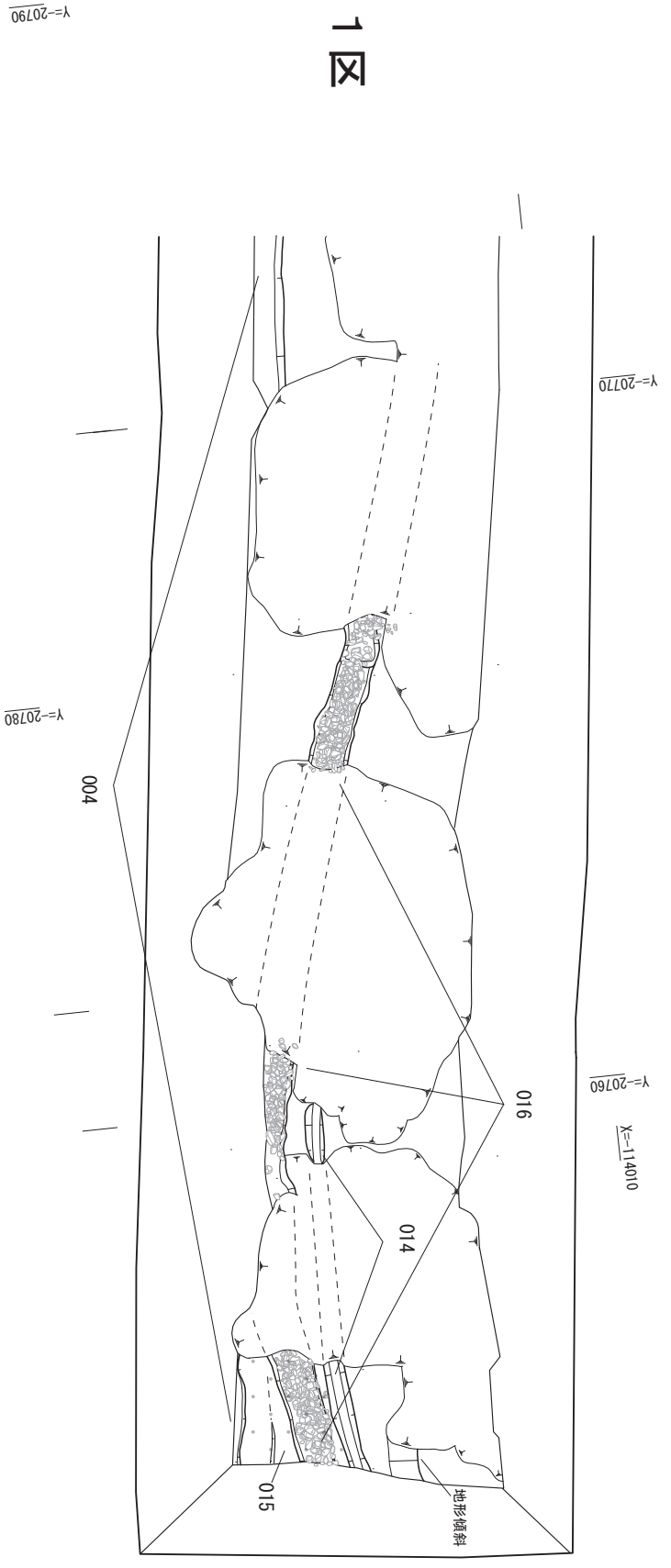


图8 1、2区遺構平面图



凡例
 整地土檢出範圍



图9 1区遺構平面图

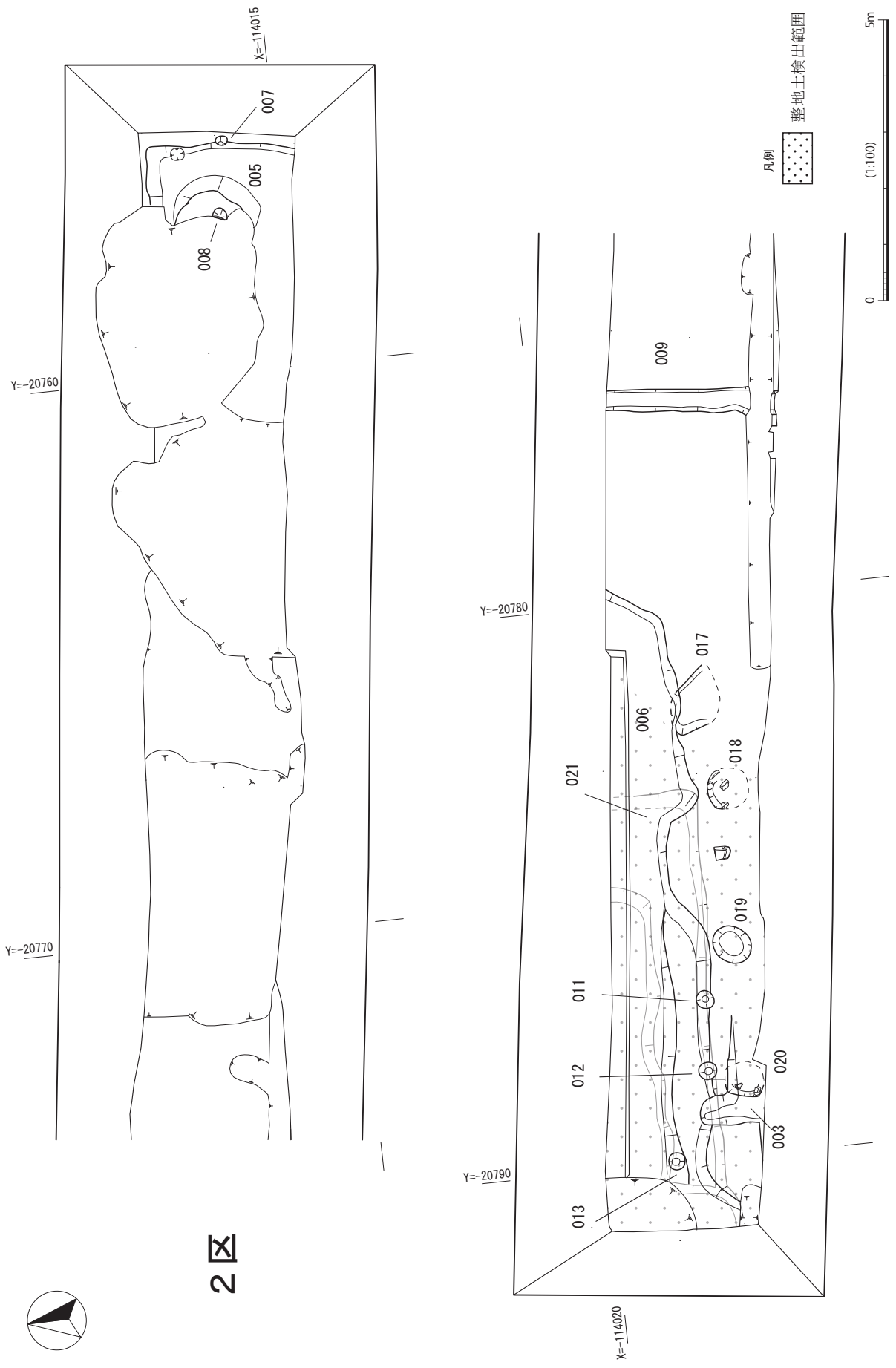
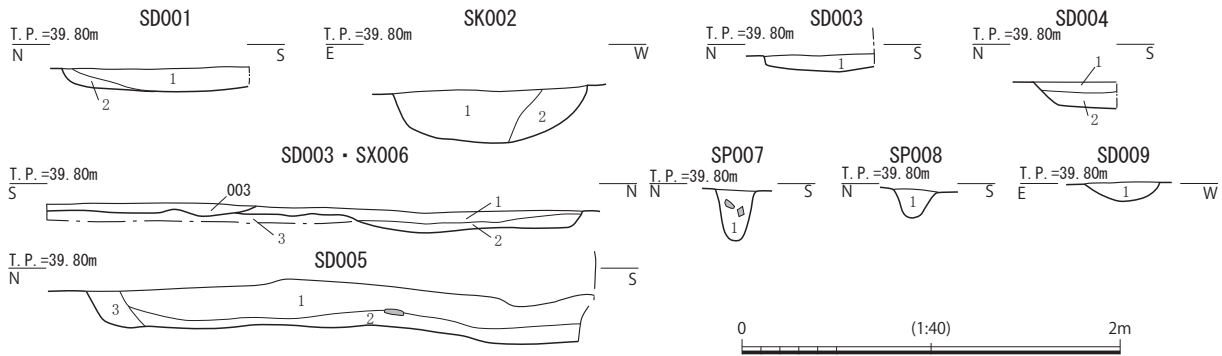
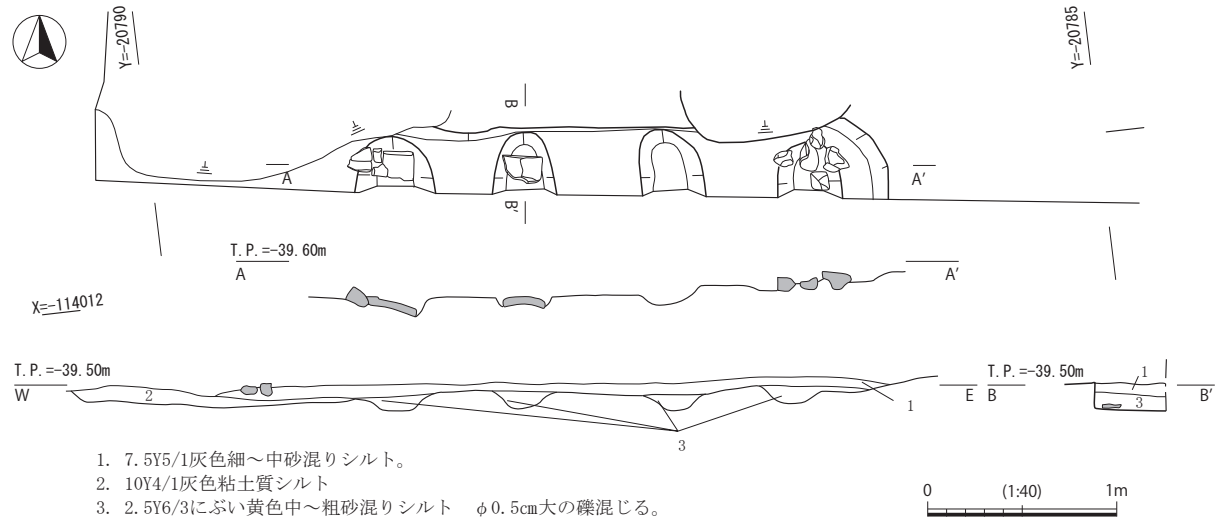


图 10 2区遺構平面図



- SD001 1. 7.5Y4/1灰色中～粗砂混りシルト φ 2～4 cm大の礫が混じる。
 2. 7.5Y5/1灰色細砂混りシルト。
- SK002 1. 5Y4/1灰色細～中砂混りシルト
 炭化物、地山ブロックを少量含む。
 2. 5Y5/1灰色中～粗砂混りシルト 地山ブロック混じる。
- SD003 1. 10YR4/1 褐灰色中～粗砂混りシルト
 φ 1 cm大の礫、炭化物を少量含む。
- SD004 1. 10YR5/1 褐灰色細～中砂混りシルト。
 2. 10Y4/1 灰色粗砂混りシルト。
- SD005 1. 7.5Y5/1 灰色シルト質粘土に炭化物が少量混じる。
 2. 10YR5/1 灰色細砂混りシルト質粘土。
 3. 10Y5/1 灰色中～粗砂混り粘土。
- SX006 1. 10YR4/2 灰黄褐色中～粗砂混りシルト
 φ 1～4 cm大の礫と炭化物が少量混じる。
 2. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混りシルト。
 3. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混りシルト
 φ 0.5～1 cm大の礫多く混じる。(地山)
- SP007 1. 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混りシルト。
 SP008 1. 2.5Y6/4 にぶい黄色中～粗砂混りシルト。
 SD009 1. 2.5Y6/4 にぶい黄色中～粗砂混りシルト
 φ 0.3～0.5 cm大の礫が混じる。

図 11 SD001・003～005・009、SK002、SX006、SP007・008 土層断面



1. 7.5Y5/1 灰色細～中砂混りシルト。
 2. 10Y4/1 灰色粘土質シルト
 3. 2.5Y6/3 にぶい黄色中～粗砂混りシルト φ 0.5 cm大の礫混じる。

図 12 SX010 平面・断面図

である。上位の整地により削平されている。

SD016 東西方向に蛇行しながら延びる溝で、今回検出した溝のなかで最も古い時期のものである。幅 0.5～0.6m、深さは東端が 0.14m、西端が 0.3m であったが、これは検出レベルが東端は 0.1m 程低いことから、廃絶後の整地により削平されたものと考えられる。埋土は 2.5Y5/1 黄灰色細砂混りシルトである。底面は東から西へ向かって約 0.1m 低く傾斜する。断面形状は上方に開き、底面に向かって側面が直立し、平坦な底面につづく箱状を呈する。溝内には多くの河原石が敷き詰められていた。礫の大きさは直径 10～25 cm で、色調がほぼ灰色か白色であることから選別されたものであり、装飾的な意味をもつと考えられる。礫は重なりあい敷かれていたが、上下で構造的な変化はみられなかった。SD016 は地形の変化に沿った排水を目的としただけでなく、鑑賞用としての役割があったことが推測される。埋土内から平安時代後期の瓦が出土した。

SP017 2区西側で検出した。SX006 に切られる。幅 1.0m、深さ 0.05m。埋土は 10YR4/1 褐灰色粗

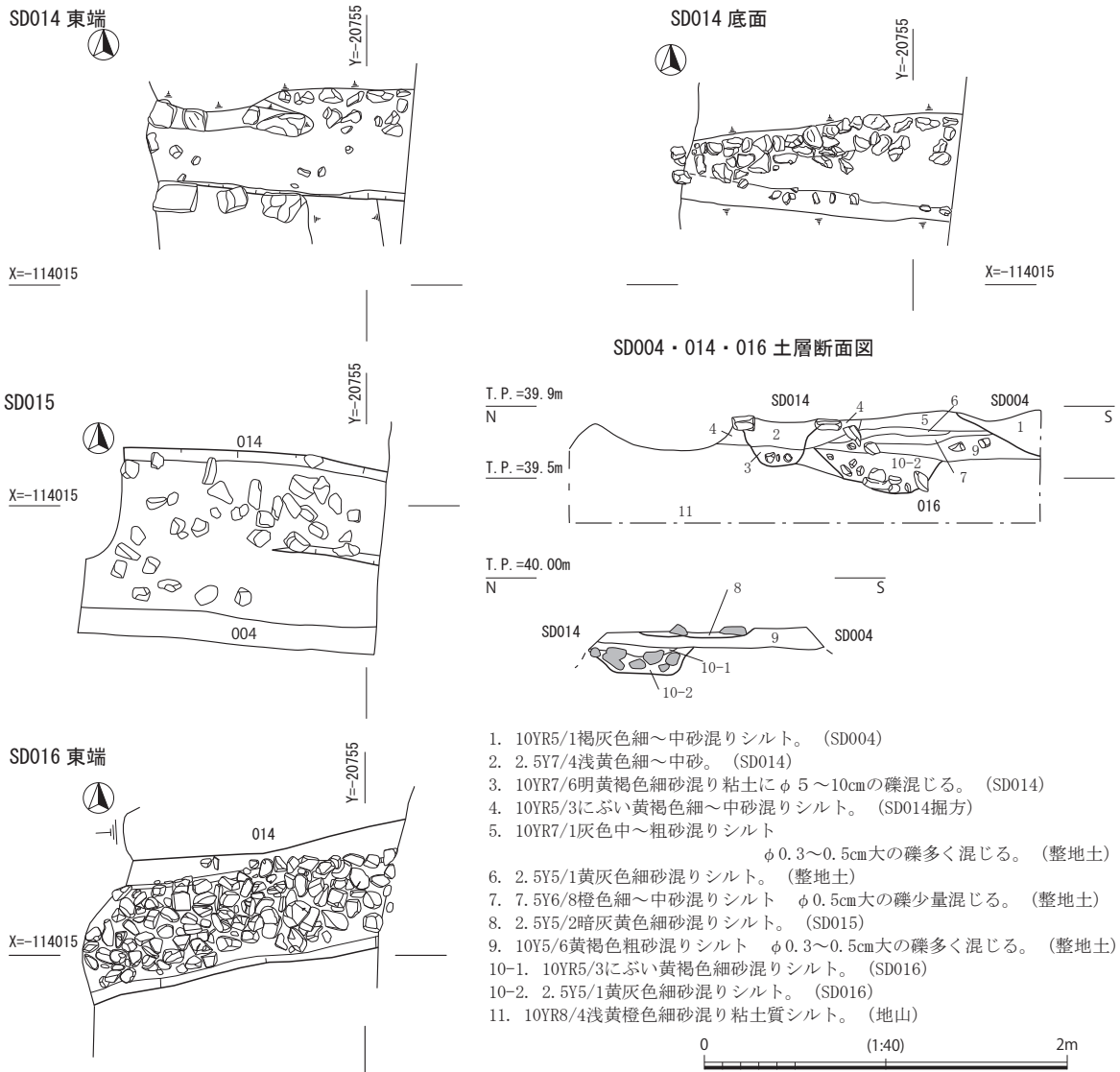


図 13 SD014～016 平面・土層断面図

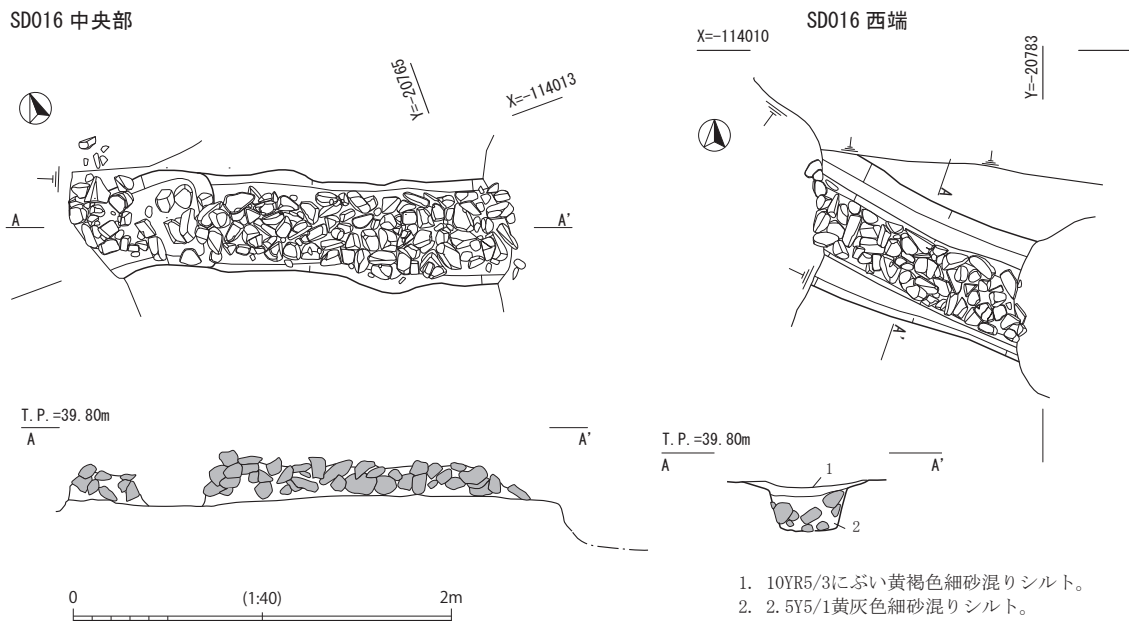


図 14 SD016 平面・土層断面図

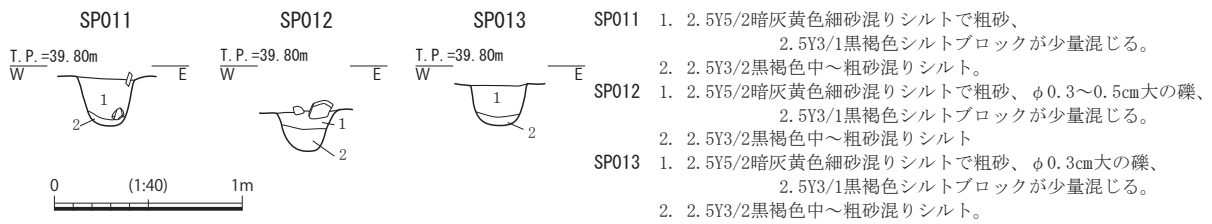


図 15 SP011 ~ 013 土層断面図

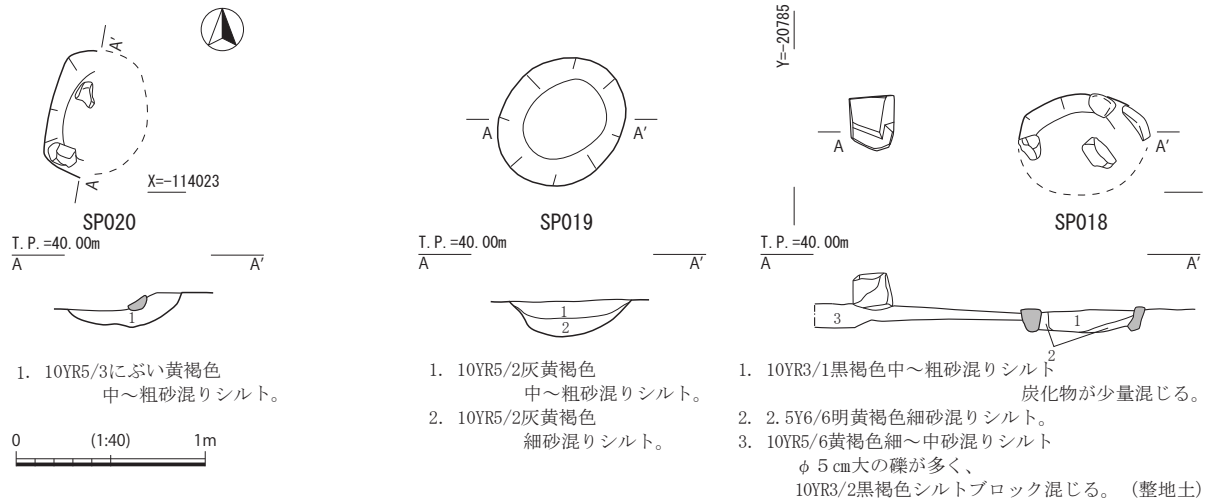


図 16 SP018 ~ 020 平面・土層断面図

砂混りシルトに 2.5Y3/1 黒褐色シルトブロックが混じる。

SP018 SP018 ~ 020 は 2 区の Y=-20770 より西側 10m の範囲の整地土上面で検出した。SP018、021 には根石が残る、礎石据え付け穴である。埋土内から瓦の細片が出土した。SP018 は直径 0.8m、深さ 0.1m。埋土は 10YR3/1 黒褐色中～粗砂混りシルトで炭化物が少量混じる。この西で検出した人頭大の礫はこのピットに伴う根石が移動したものと考えられる。

SP019 直径 0.7m、深さ 0.2m。埋土は 10YR5/2 灰黄褐色中～粗砂混りシルトである。

SP020 直径 0.7m、深さ 0.18m。埋土は 10YR5/3 にぶい黄褐色中～粗砂混りシルトである。

Y=-20770 ~ 20780 間の柱穴については、平面上で検出した柱穴と昭和 53 年度調査平面図を合成した図をもとに検討を行ったが認識できなかった。そのため推定される柱穴列の東西軸を断ち割ったが、この間で確認することはできなかった。

SX021 2 区の Y=-20770 以西の整地土を除去した地山上面で検出した、方形の土坑状遺構である。東西 8m 以上で東端は北へ直角に曲がる。南肩は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦で約 0.2m の段差をもち北へ低くなる。底面は明黄褐色粘土に直径 10cm 大の礫が混入しており、地盤の安定を意図とした地業の一連の行為と考えられる。深さ 0.5 ~ 0.7m。埋土は地山由来の 10YR5/6 黄褐色細～中砂混りシルトと土壌化した 5Y4/1 灰色中～粗砂混りシルトの大きく 2 層に分かれる。埋め戻しはこれらの土が混りあい乱雑であった。この遺構の南辺は直線的で、東延長上は昭和 53 年度調査で確認された東西雨落ち溝の南辺とほぼ一致する。遺物が少ないことから、建物の造成による土地改変に伴うものであることが考えられる。埋土内より土師器細片と混入品である須恵器、弥生土器の細片が出土した。時期は平安時代後期に属すると考えられる。

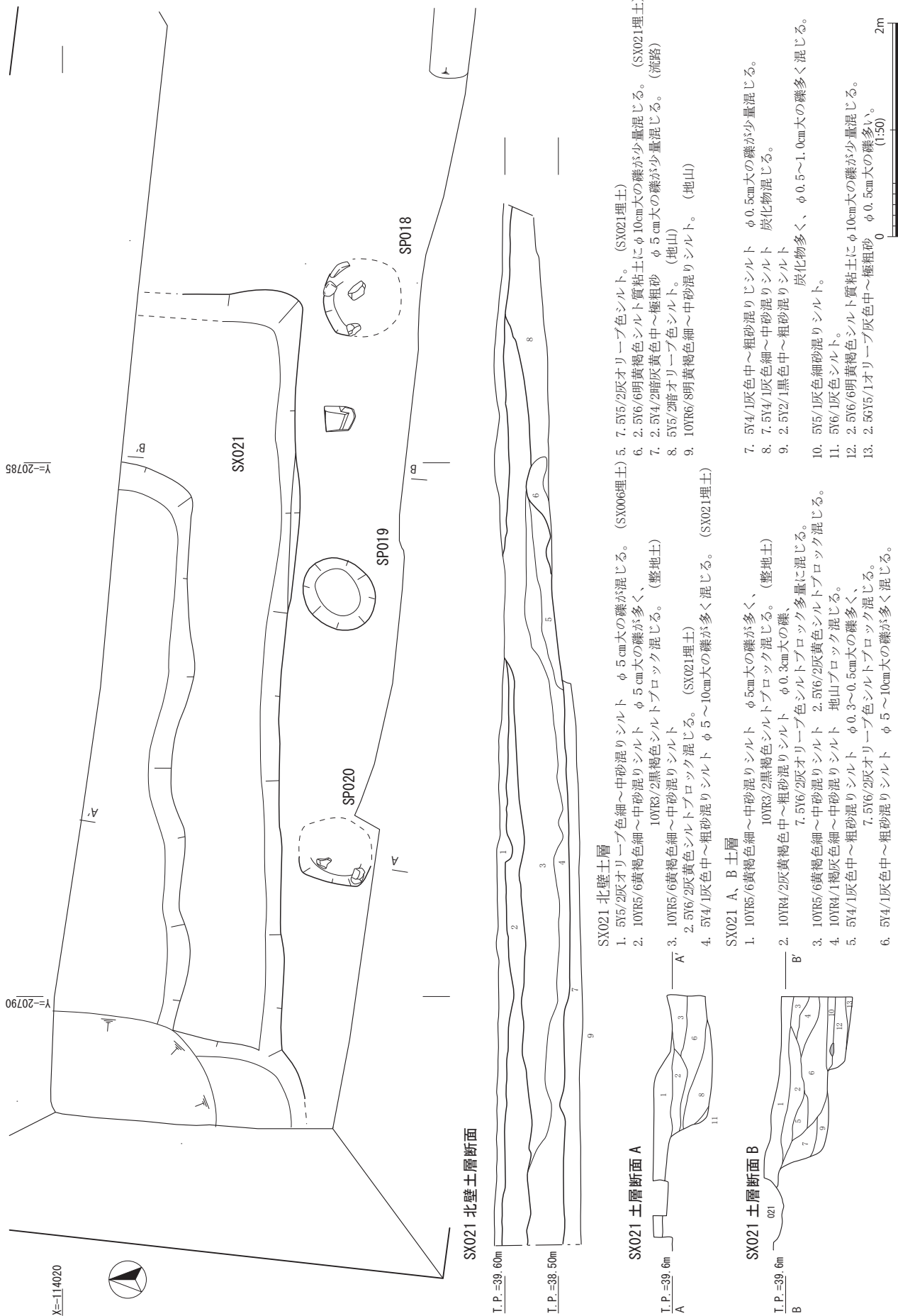


図 17 SX021 平面・土層断面図

SX021 北壁土層

1. 5Y5/2灰オリーブ色細～中砂混りシルト φ 5cm大の礫が混じる。(SX006埋土)
2. 5Y6/6明黄褐色シルト質粘土にφ 10cm大の礫が少量混じる。(SX021埋土)
3. 10YR3/2黒褐色シルトブロック混じる。(整地土)
4. 5Y4/1灰色中～粗砂混りシルト φ 5～10cm大の礫が多く混じる。(SX021埋土)
5. 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト。(SX021埋土)
6. 2.5Y6/6明黄褐色シルト質粘土にφ 10cm大の礫が少量混じる。(SX021埋土)
7. 2.5Y4/2暗灰黄色中～極粗砂 φ 5cm大の礫が少量混じる。(流路)
8. 5Y5/2暗オリーブ色シルト。(地山)
9. 10YR6/8明黄褐色細～中砂混りシルト。(地山)

SX021 土層断面 A

1. 10YR5/6黄褐色細～中砂混りシルト φ 5cm大の礫が多く、10YR3/2黒褐色シルトブロック混じる。(整地土)
2. 10YR4/2灰黄褐色中～粗砂混りシルト φ 0.3cm大の礫、7.5Y6/2灰オリーブ色シルトブロック多量に混じる。
3. 10YR5/6黄褐色細～中砂混りシルト 地山ブロック混じる。
4. 10YR4/1褐灰色細～中砂混りシルト φ 0.3～0.5cm大の礫多く、7.5Y6/2灰オリーブ色シルトブロック混じる。
5. 5Y4/1灰色中～粗砂混りシルト φ 5～10cm大の礫が多く混じる。

SX021 土層断面 B

1. 10YR5/6黄褐色細～中砂混りシルト φ 5cm大の礫が少量混じる。
2. 5Y4/1灰色細～中砂混りシルト 炭化物混じる。
3. 10YR5/6黄褐色細～中砂混りシルト 炭化物多く、φ 0.5～1.0cm大の礫多く混じる。
4. 5Y5/1灰色細シルト。
5. 5Y6/6明黄褐色シルト質粘土にφ 10cm大の礫が少量混じる。
6. 5Y4/1灰色中～粗砂混りシルト φ 5～10cm大の礫が多く混じる。
7. 5Y6/2灰オリーブ色シルトブロック混じる。
8. 5Y4/1灰色中～粗砂混りシルト φ 0.5cm大の礫多い。(1:50)

Ⅲ 遺物

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁、瓦、埴、壁材などで、遺物量はコンテナ約5箱分であった。

2層(耕作土)内出土遺物(図18、図版6・7・10) 陶器、瓦、砥石などが出土した。

1は陶器播鉢である。口縁端部に厚みをもち内面に摘み出した突帯がつく。外面は回転ナデ、鉄釉を施す。口径27.5cm。瀬戸美濃焼。室町時代に属すものと思われる。

軒平瓦 2は内区に唐草文の一部が残存する。凹面はナデを施す。瓦当厚さは1.4cm。黒色を呈す。3は内区を圏線で画し唐草文の一部が残存する。顎凸面はナデを施す。瓦当厚さは2.6cm。暗灰色を呈す。2、3は室町時代に属す。4は三葉弁を中心飾りとし、2回反転の唐草文が展開する。凸面、凹面ともにナデで仕上げる。瓦当厚さは5.1cm。黒色を呈す。近世のものである。

丸瓦 5は凸面はケズリのちナデ、凹面はナデを施す。中世に属するものである。

6は砥石である。方形の板状を呈する。目の細かさから「仕上げ」に使うものと思われる。3面の砥面を有する。厚さ4.9cm。石材は白色を呈する粘板岩である。

室町時代以降

SD001内出土遺物(図20・21、図版7) 土師器、陶器、瓦の細片が出土した。

軒平瓦 23は唐草文の一部がみられるが、全体に摩滅が著しく調整は不明である。顎は貼り付けにより整形される。瓦当厚さは3.0cm。黄褐色を呈す。平安時代後期に属す。

平瓦 41の凸面は縦方向の縄目タタキ、凹面はナデを施す。胎土は粗く、2mm以下の砂粒が多く混じる。厚さは1.5～2.0cm。灰オリーブ色を呈す。45の凸面はナデ、凹面は布目がのこる。厚さ1.9cm。灰色を呈す。

SK002内出土遺物(図19、図版10) 灰釉陶器、瓦の細片などが出土した。

9は灰釉陶器椀である。口縁端部はわずかに外反する。口径13.2cm。平安時代のもと思われる。

SD004内出土遺物(図19～22・24、図版6・8・10) 土師器、陶磁器、埴、瓦の細片などが出土した。

14は土師器火舎である。口縁部は垂直に立ち上がり、口縁端部上面は平坦で内面に厚みを持つ。内面にススが付着する。口径21.6cm。

7は陶器播鉢である。外面に横方向のケズリを施す。備前焼。室町時代に属す。

10は中国製白磁碗である。高台は削り出し、見込みは蛇の目釉剥ぎする。底径6.2cm。平安時代後期に属す。

軒丸瓦 19は右巻き三巴文軒丸瓦で、圏線で画される外区には珠文帯が巡る。瓦当裏面はナデを施す。瓦当厚さは7.9cm。灰色を呈す。室町時代に属す。

丸瓦 29、30は側面をヘラケズリし、凸面はナデを施す。凹面は布目がのこる。29は厚さ2.1cm。黄褐色を呈す。30は厚さ2.0cm。暗灰黄色を呈す。31の凸面は縦方向の縄目タタキ、凹面はナデで仕上げる。厚さ1.2cm。灰黄色を呈す。

平瓦 36の凸面は摩滅し調整不明、凹面はナデを施す。厚さ2.0cm。黄灰色を呈す。42は端面をヘラケズリし、凸面はナデを施す。凹面は布目がのこる。厚さ1.8cm。黄灰色を呈す。

51は埴である。外面をナデで仕上げる。厚さ3.6cmである。中世に属すものと思われる。

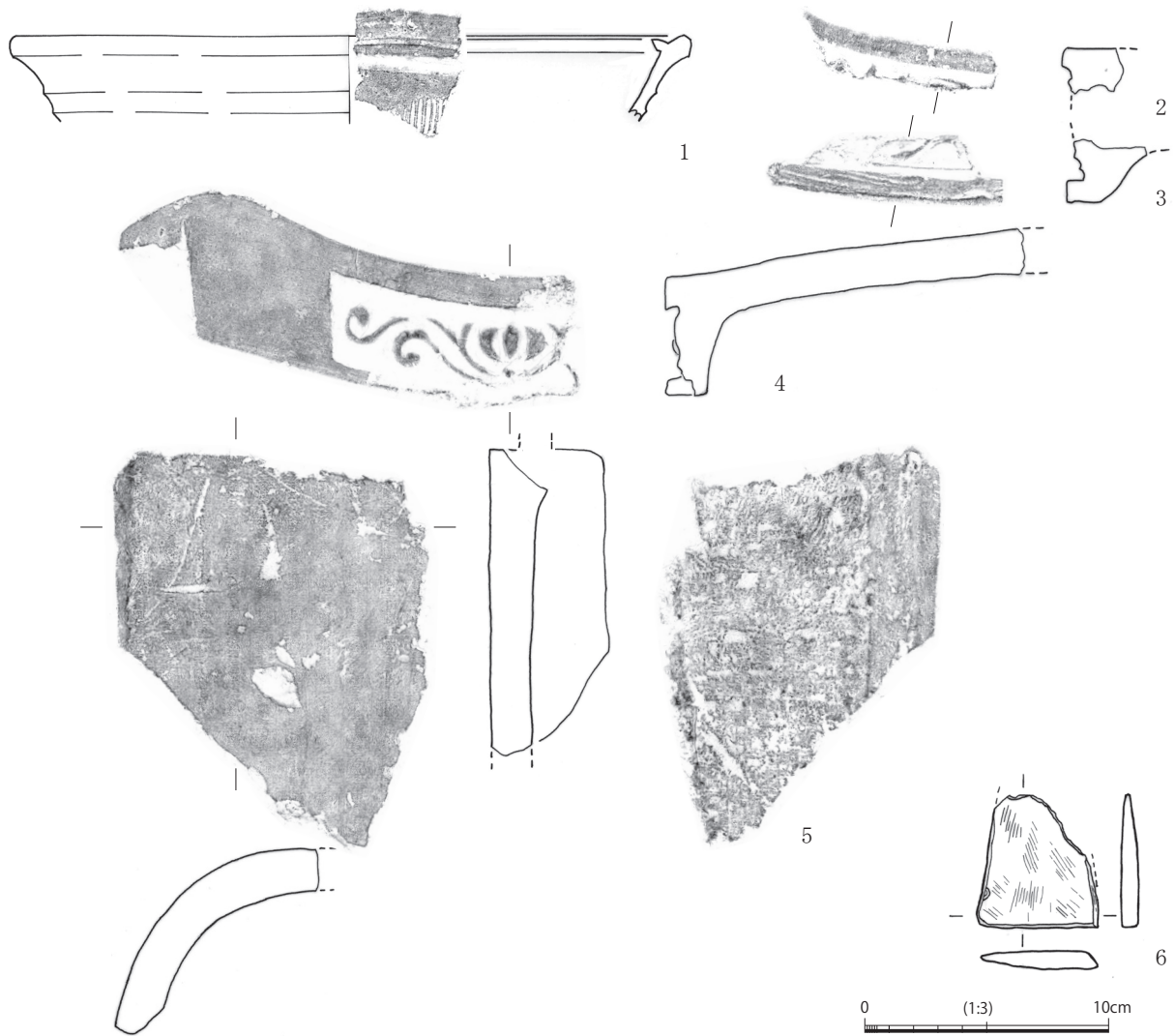


図18 2層(1～6)内出土遺物実測図

SD005 内出土遺物(図20～22・24、図版6・10) 瓦、砥石などが出土した。

軒丸瓦 16は右巻き三巴文軒丸瓦である。瓦当厚さは2.9cm。黒色を呈す。21は右巻き三巴文軒丸瓦で珠文帯を配し、巴文の中心にいわゆるコンパス芯がみられる。摩滅し調整は不明である。瓦当厚さは13.5cm。灰白色を呈す。16、21は室町時代に属す。20は複弁蓮華文軒丸瓦で2本の圈線内に珠文を配す。中房に雄蕊帯が巡る。瓦当厚さは6.2cm。灰白色を呈す。平安時代後期のものである。

軒平瓦 22は均整唐草文軒平瓦で中心飾りの上端からC字状の唐草文が展開する。瓦当部は包込み技法により整形される。外面に自然釉が付着し、灰色を呈する。播磨系で尊勝寺、鳥羽離宮跡出土の瓦に同文がみられる。瓦当厚さは5.3cm。平安時代後期に属す。

平瓦 33は端部をヘラケズリのちナデ、凸面は縦方向、条線状の粗いタタキを施し、凹面には布目がのこる。厚さ2.5cm。灰色を呈す。34の凸面は格子状のタタキ、凹面は布目がのこる。厚さ2.5cm。灰色を呈す。35は端部をヘラケズリし、凸面は斜め方向に条線状の粗いタタキのちナデを施す。凹面は布目がのこる。厚さ2.2cm。暗灰色を呈す。37は端部をヘラケズリし、凸面は格子状のタタキ、凹面は布目がのこる。厚さ2.2cm。灰色を呈す。38の凸面はナデで仕上げる。凹面は布目がのこる。厚さ1.5cm。黄灰色を呈す。39は凸面、凹面ともに摩滅する。胎土には3mm以下の砂粒が多く混じる。厚さ1.4cm。灰オリーブ色を呈す。40の凸面はヘラケズリのち、斜め方向のタタキを施し、ナデで仕

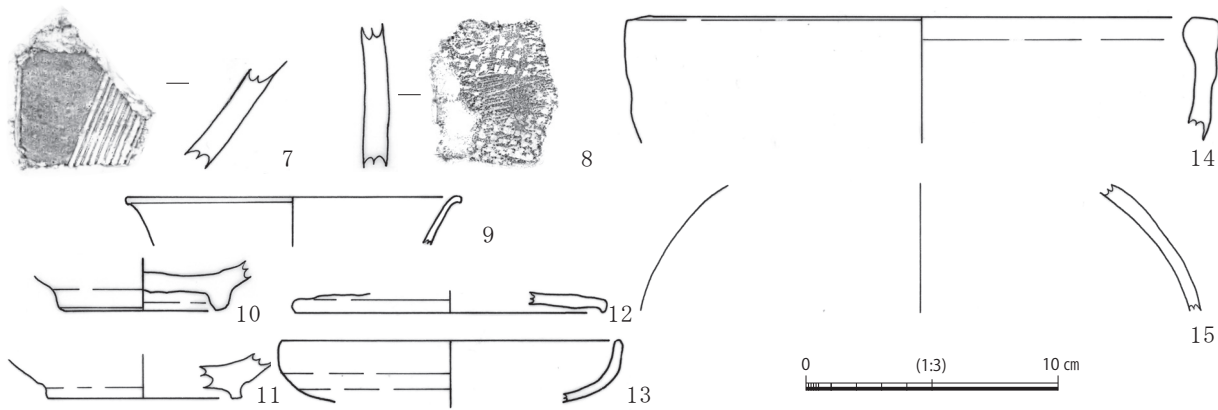


图 19 SK002(9)、SD004(7·10·14)·014(8)、SX006(11)·021(15)、SP011(13) 内出土遺物実測図

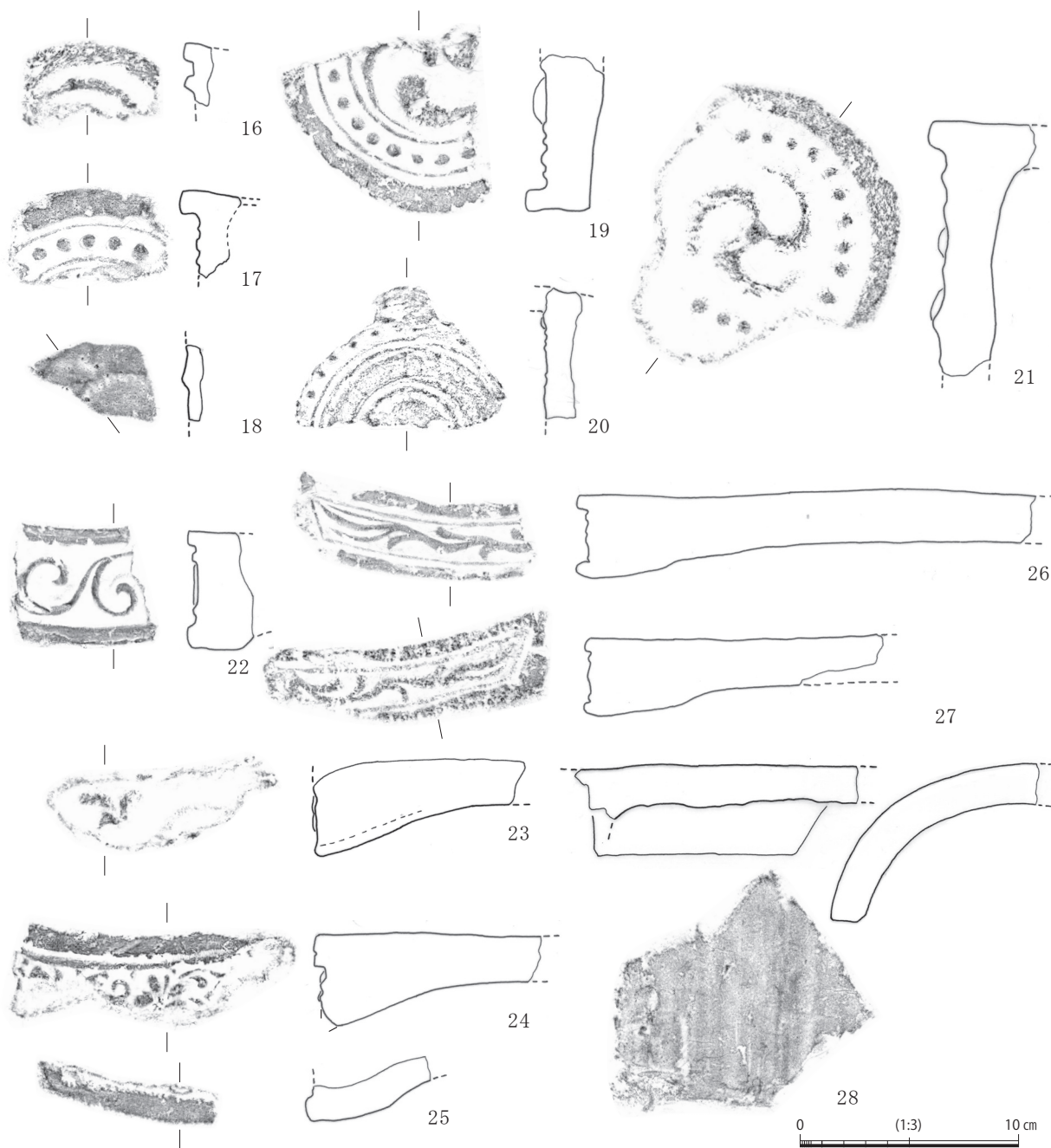


图 20 SD001(23)·004(19)·005(16·20~22)·014(26·29)·016(18)、SX006(17·24·25·28) 内出土軒丸・軒平瓦実測図

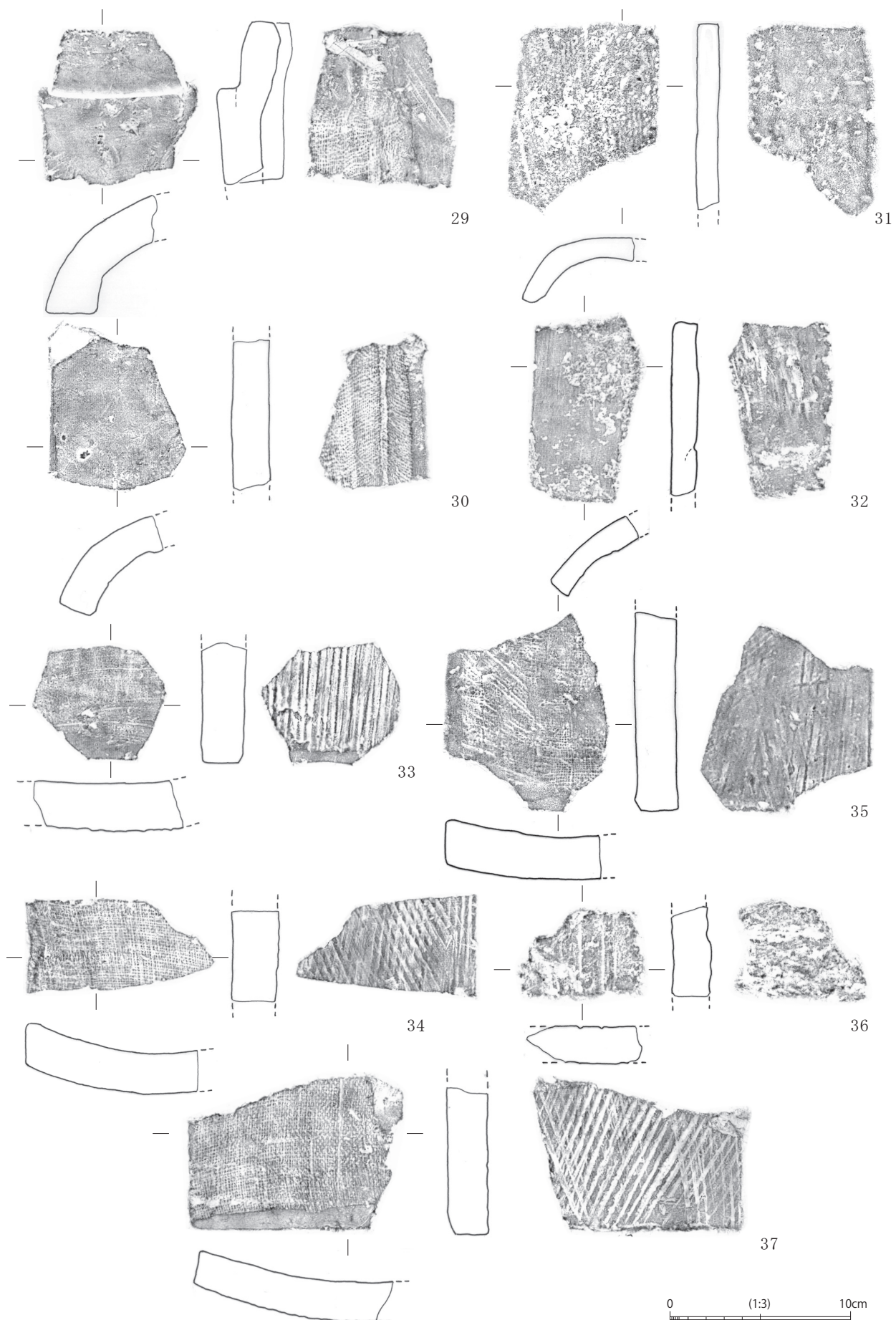


图 21 SD004 (29 ~ 31 · 36)、005 (33 ~ 35 · 37)、SX006 (32) 内出土出丸 · 平瓦実测图

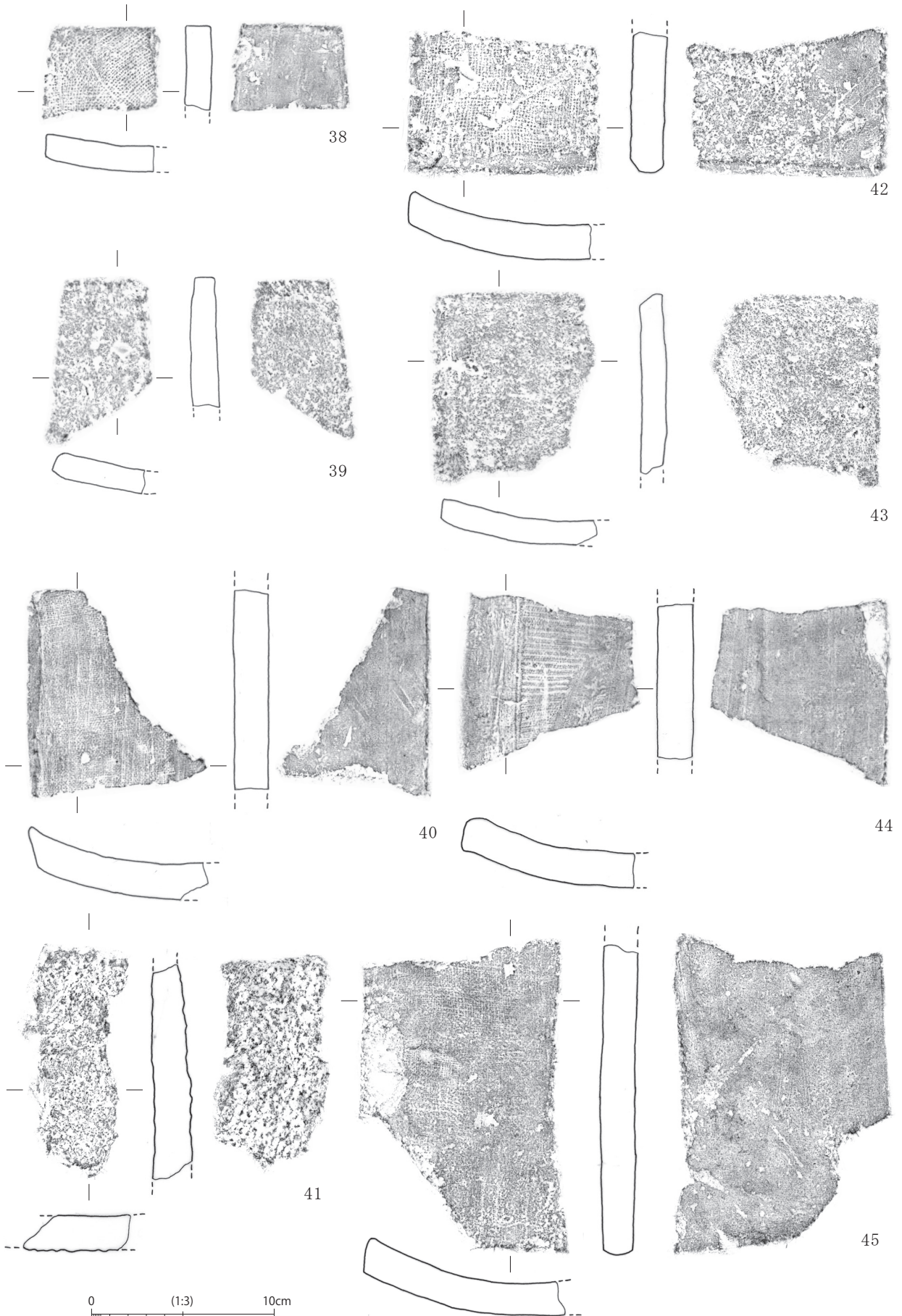


图 22 SD001 (41·45)·004(42)、005(38~40·43)、SP011(44) 内出土平瓦实测图

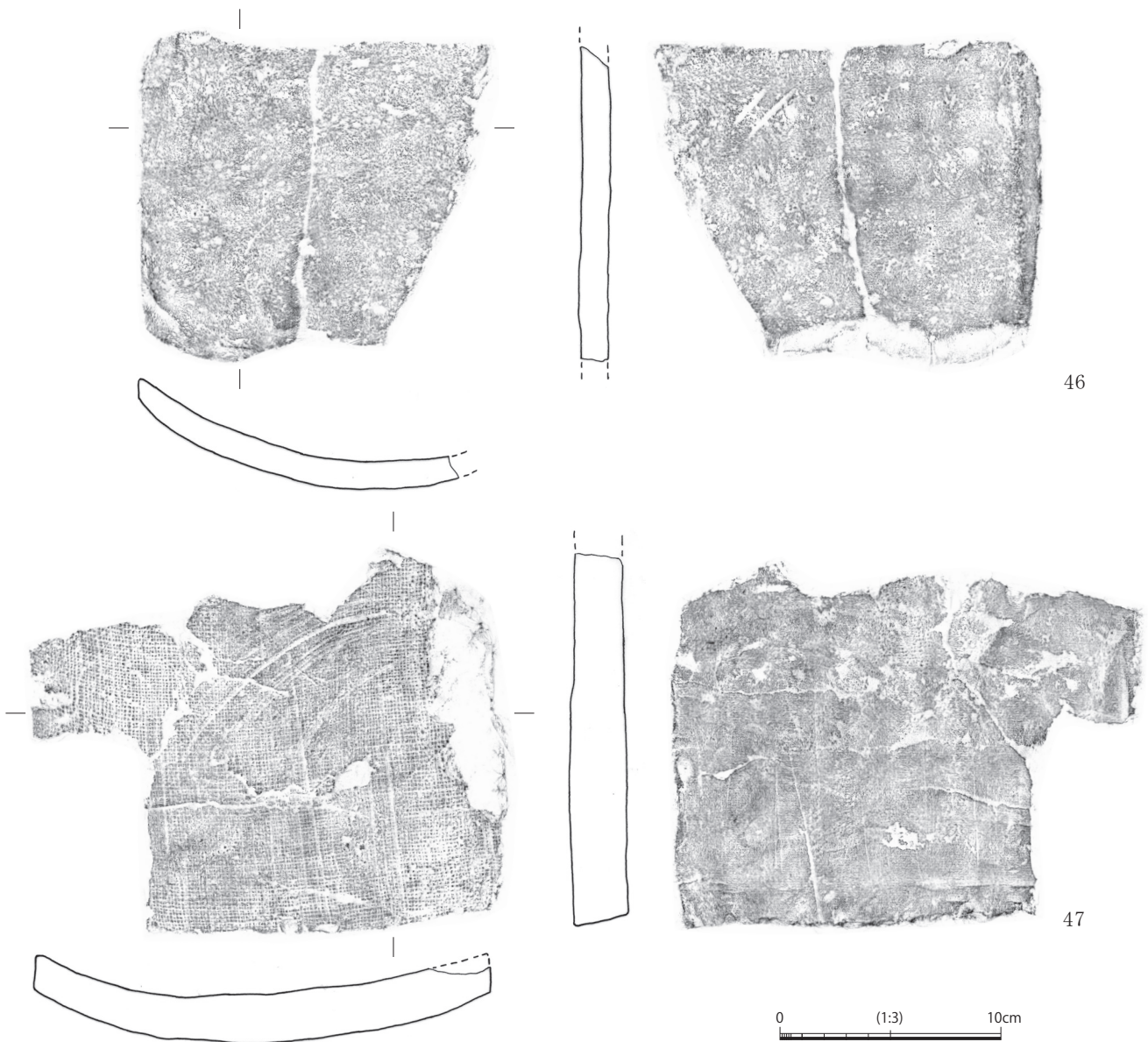


図 23 SX010(46・47) 内出土平瓦実測図

上げる。凹面は細かい布目がのこる。厚さ 1.9 cm。黄灰色を呈す。43 は凹面、凸面ともに摩滅し調整不明である。厚さ 1.3 cm。黄褐色を呈す。

48 は砥石の欠損品の一部である。砥面は 2 面残る。厚さ 6.3 cm。49 は円礫を用いた砥石の欠損品である。1 面のみ残った砥面には成形時の敲打痕が残る。厚さ 3.1 cm。いずれも砂岩製である。

SX006 内出土遺物 (図 19 ~ 22、図版 6 ~ 8・10) 灰釉陶器、瓦のほか壁材などが出土した。

11 は灰釉陶器碗である。高台は削り出し、内外面は施釉する。底径 7.7 cm。平安時代後期に属す。

軒丸瓦 17 は右巻き三巴文軒丸瓦で、圏線で画される外区には珠文帯が巡る。ナデで仕上げる。瓦当厚さは 3.9 cm。暗灰色を呈す。室町時代に属すものである。

軒平瓦 24 は中心飾りのある均整唐草文軒平瓦で、内区を圏線によって画す。顎は貼り付けにより整形される。凸面は縦方向のナデ、凹面は布目が明瞭にのこる。瓦当厚さは 3.9 cm。灰色を呈する。25 は顎の一部が残存する。摩滅し文様は不明瞭であるが唐草文がのこる。顎は貼り付けにより整形される。瓦当厚さは 1.7 cm。黄褐色を呈す。24、25 は平安時代後期に属す。

丸瓦 32 の凸面はヘラケズリのちナデ、凹面はナデを施す。厚さ 1.4 cm。凸面は灰色、凹面は黄褐

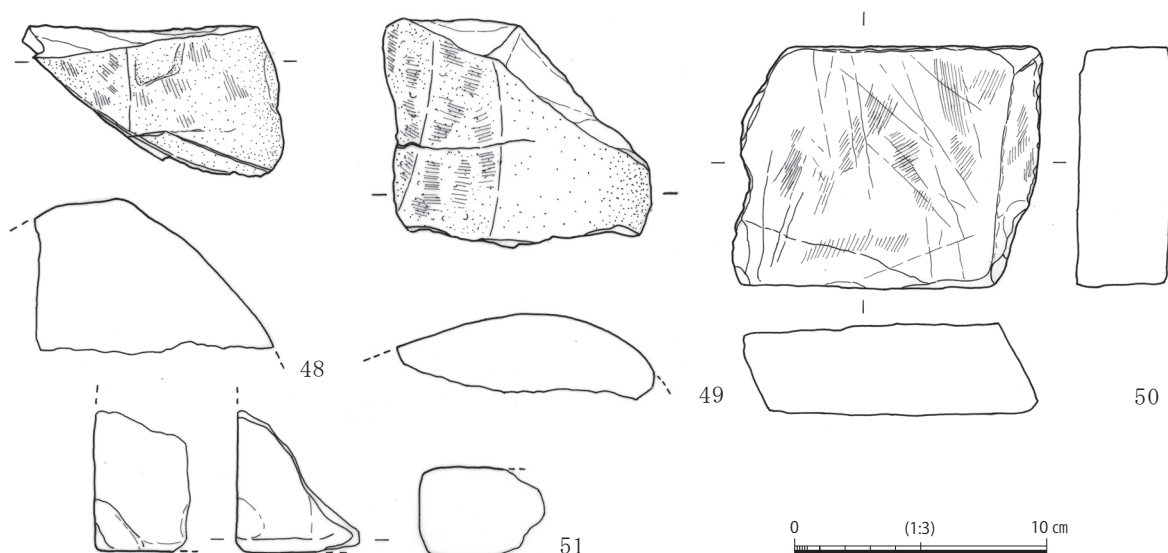


図 24 SD004(51)・005(48・49)・016(50) 出土石器・埴実測図

色を呈す。

SX010 内出土遺物 (図 23、図版 8) 瓦が出土した。

平瓦 46 の凸面はナデを施す。凹面は摩滅し調整不明である。厚さ 1.2 cm。灰黄色を呈す。47 の凸面はナデ、凹面は糸切り痕と布目が明瞭にのこる。厚さ 2.4 cm。灰色を呈す。

平安時代後期

SP011 内出土遺物 (図 19・22、図版 10) 土師器、瓦が出土した。

13 は土師器皿である。直立気味に立ち上がる口縁をもつ。外面はヨコナデを施す。口径 13.3 cm。平安時代後期に属す。

平瓦 44 は凸面はタタキのちナデ、凹面は布目がのこる。厚さ 1.9 cm。灰色を呈す。

SD014 内出土遺物 (図 19・20、図版 7・10) 須恵器、瓦の細片が出土した。

8 は須恵器甕である。体部外面に格子状のタタキ目がのこる。

軒平瓦 26、27 は同文の均整唐草文軒平瓦である。内区は圏線で画され、巻き込みの弱い唐草文が展開する。顎は貼り付けにより整形され、凹面は布目痕の上にハケメがのこる。26 の凸面は縦方向のケズリのちナデを施す。瓦当厚さは 3.3 cm。27 の凸面は縦方向のナデを施す。瓦当厚さは 3.2 cm。4 mm 以下の砂粒が混り、いずれも青灰色を呈す。平安時代後期に属す。

SD016 内出土遺物 (図 20・24、図版 6・10) 瓦、砥石が出土した。

軒丸瓦 18 は複弁蓮華文軒丸瓦である。外面は摩滅する。黒色を呈する。中房に雄蕊帯が巡る。瓦当厚さは 3.5 cm。平安時代後期に属す。

50 は砥石である。方形の板状を呈する。目が細かいため仕上げ砥石と思われる。3 面の砥面を有する。厚さ 3.5 cm。石材は白色を呈する火成岩である。

SX021 内出土遺物 (図 19、図版 10) 弥生土器、土師器、須恵器の細片が出土した。

15 は弥生土器の壺の体部上半である。著しく摩滅し調整は不明。弥生時代後期に属すものと思われる。

2 区整地土内出土遺物 (図 19、図版 10) 須恵器、瓦の細片が出土した。

12 は須恵器杯蓋である。扁平な上部をもち、口縁に短いかえりがつく。外面は回転ナデを施す。口径 12.2 cm。飛鳥時代に属す。

IV まとめ

検出した遺構は、室町時代以降（図 25）と平安時代後期（図 26）である。室町時代以降の遺構についての全容は攪乱が著しく詳細は不明であるが、いくつかの遺構の重複関係が認められることから平安時代後期以降も継続した土地利用が行われている。遺物が少ないことから、集落の縁辺部にあたると思われる。平安時代後期の遺構は礎石建物とこれに関連する溝などを検出した。

本調査区は東側が昭和 53 年度に行われた調査区と重複しており、この調査で確認される遺構との位置関係を考慮しながら調査を行う必要があったため、各調査区を世界座標系にのせる合成作業を行った。また、先立って行われた試掘調査 2 区でも、柱穴や溝が検出されていたため同作業を行った。

昭和 53 年度調査図の合成は、石敷きの溝（SD016）の残存部分と、壁断面に残っていた調査区の東辺の痕跡、遺構検出面の東辺と本調査区東端部の残存状況を照らし合わせて行った。試掘調査 2 区は、壁と調査区平面で確認された調査痕跡をもとに合成を行った。壁断面に残る痕跡については、測量しポイントを平面図に落とした。この作業により、検出されていた礎石建物がほぼ真北を向くことが明らかとなるとともに、今回の調査成果とあわせて溝の重複関係、建物の展開状況を確認することができた。以下、合成図をもとに主な遺構について記す。建物、柱穴（S）番号は昭和 53 年度調査報告番号を使用した。

礎石建物については、これに伴うと考えられる柱穴を今回の調査で東西方向の柱穴 3 基、試掘調査で南北方向の柱穴 2 基を確認した。柱間は SP018 ～ 019 が 2.7m（9 尺）、SP019 ～ 020 は 2.4m（8 尺）で、建物 1 の柱穴列の西延長部に位置する。また、試掘調査の 2 基は、建物 2 の東辺とほぼ平行に並ぶ。これらは SP018 を隅に西と北に位置するが、この柱穴列に沿うように延びる遺構に SX021 がある。SX021 は整地土の下で検出したものであるが、上面は地山に比べ軟弱であったと考えられることから、試掘調査の柱穴と SP018 の南北列が建物 2 の西端であることが推定される。以上から今回の調査と昭和 53 年度調査成果を踏まえ各建物について述べる（図 27）。建物 1 は北庇の北辺と建物 2 の東辺に沿う雨落ち溝の状況から、建物 2 と一連の建物である。今回の調査では、新たな知見は得られなかった。建物 2 は、確認された柱穴から建物の復元を行った。庇を仮定すると、東の庇の出は 10 尺（S 4 - S 5）、北の庇の出は 8 尺（S 9 - S10）と考えられる。西は SP018 を側柱として東と同様に 10 尺の庇の出とすると、身舎の東西全長は復元値で約 11.2m（37 尺）となる。東西棟と仮定するなら身舎の東西柱間は 3 間となり、等間ならば身舎の柱間は 12.5 尺等間、中央間を広くとるなら両側の柱間 12 尺で中央の柱間 13 尺が考えられる。また、北に 5 尺延びる柱が存在するが、これは北縁の可能性もある。これらのことから、建物 2 は身舎が東西 3 間で少なくとも東西北に庇が付き北縁をもつ建物が復元できる。調査区西側で検出した SP019、020 は建物 2 と柱間が異なることから、西へ展開する建物の存在を示唆する。これら東西に並んで展開する建物群は、同時期に一連の計画性のもとに建てられたと考えられる。

溝については、1 区で顕著に検出した。時期は室町時代以降の溝 2 条、平安時代後期の溝 3 条があり、方向は南東から、北西方向に低く傾斜する。検出位置はこれらの溝より北に 1.5m 程高くなる地形の段差があり、この裾部にあたる。SD016 は最も古い溝である。蛇行し溝内に選別した河原石を敷いていることから排水以外の目的が窺え、建物後方を修景する役割があったと推測できる。一つの仮説として自然地形を利用した鑑賞空間が存在した可能性が考えられる。SD014、015 は整地を行ったのちに形成

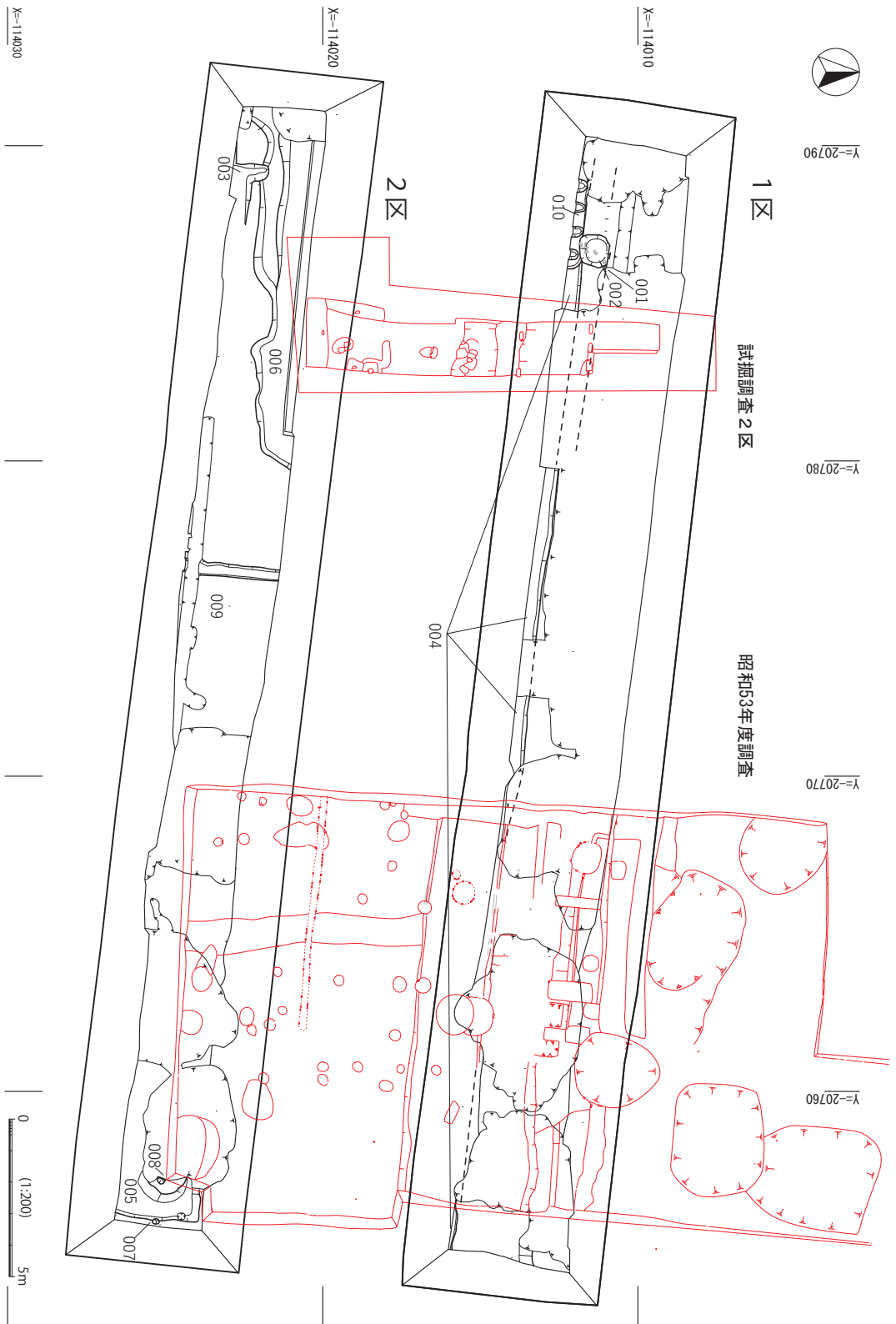


图 25 室町時代以降遺構平面图



图 26 平安時代後期遺構平面図

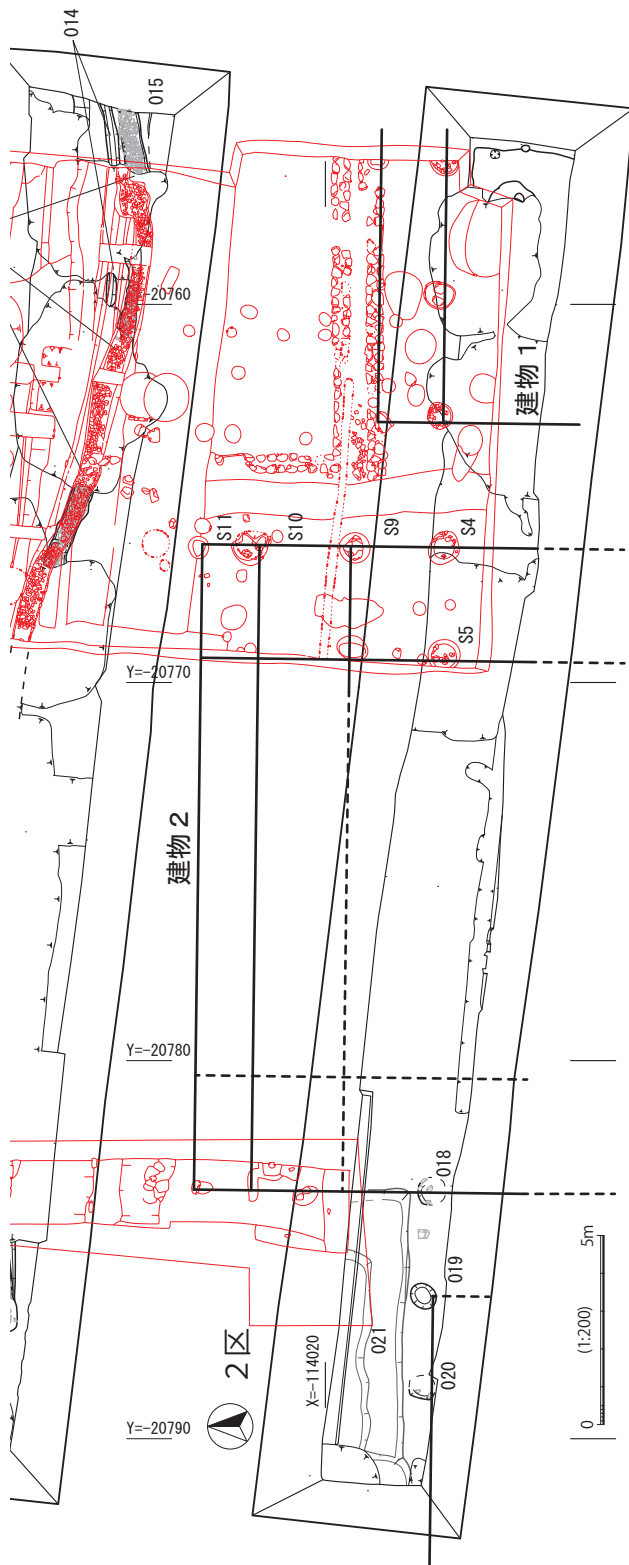


図 27 建物復元案

された溝で、SD014 は整地後、両肩に礫が丁寧に据え置かれていた。いずれも直線的に延びる。室町時代以降の溝は直線的に延び、幅 2.0m 以上と広いものとなる。これらの溝の機能は、調査区南方域への流水を防ぐためのものであるが、装飾性を考慮したものから、機能性を重視した溝への変化がみられる。

既往の調査成果で得られた立地環境から建物群が存在する平地範囲の推定を行った(図 28)。都市計画地図と国土地理院地図、一部現地測量をもとに 1m 毎の等高線を作成すると、正覚寺跡の北西部、T.P.=42.0～40.0m の範囲で緩やかな勾配の台地状の部分が認められ、建物群はここに位置する。周囲の地形変化をみると北は調査区 1 区の東西に T.P.=41.0m 地点(①、②)での起伏の変化があり、これを結ぶラインは、SD016 の北で確認された自然地形の段差の位置と近似していることから、ここに丘陵の段差が存在していたことが想定される。東は調査地に隣接する南北方向の道路から丘陵の急傾斜が東方へつづく。南は南西方向に緩やかに傾斜するが、T.P.=39.9m で自然地形の傾斜と異なる深さ 0.1m 程の窪地(③)が認められ、現地で測量を行った。西は T.P.=40.0～39.9m で急な段差があり、この下で行われた昭和 62 年度の立会調査で池の堆積と考えられる泥土層が GL-0.3～0.6m で確認されている。これらのことから平地範囲は東の斜面から西の段差までの東西約 70m、北の斜面から南の窪地までの南北約 40m であったことが推定される。③の窪地に関しては、園池の痕跡である可能性が考えられ、範囲は西の泥土層がこれに関連すると思われる。

出土遺物は瓦が主で、土器、石器などはわずかであった。瓦は細片で SD005、SX006 から廃棄された状況で多く出土した。時期は平

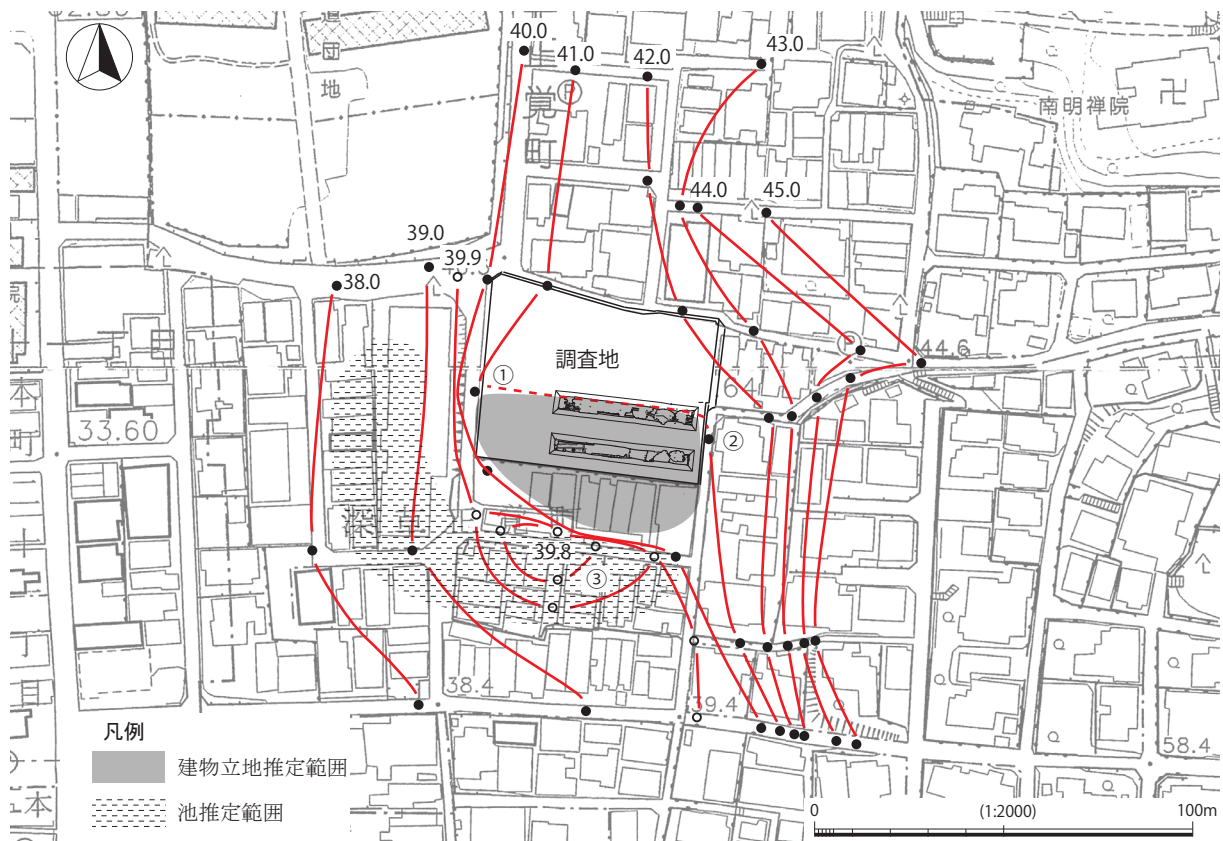


図 28 正覚寺跡建物群立地・池推定範囲

安時代後期、室町時代に属す。平瓦の厚さは 1.8～2.4 cm で灰色系、青灰色系のもののほか、細片で厚さは不明であるが黒色を呈するものがあり、これらは平安時代後期に属すと考えられる。そのほか、厚さ 1.2～1.5 cm で灰黄色系を呈し、胎土が粗いものがあり、これらは室町時代に属する瓦である。

今回の調査区は、正覚寺跡地内で確認された礎石建物の北部に位置している。今後これより南方部の調査で、詳細が明らかになることがまたれる。

参考文献

- 小森俊寛 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』 京都編集工房 2005年
- 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年
- 上村和直・上原真人・前田義明 「瓦と瓦窯の変遷」『平安京提要』 角川書店 1994年
- 上原真人 『古代学研究—13・14—』 (財)元興寺文化財研究所考古学研究室 1978年
- 「法性寺跡・正覚寺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 「法性寺跡・正覚寺跡・月輪古墳・願成古墳」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 「法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 「法性寺跡・貞観寺跡」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002—6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008—10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 『法性寺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010—11 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 『法性寺跡』 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010—19 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 「法性寺跡」『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 「法性寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2012年



1. 調査区全景（北東上空から）



2. 調査区全景（北上空から）



1. 調査前全景
(北西から)



2. 1区東壁
(西から)



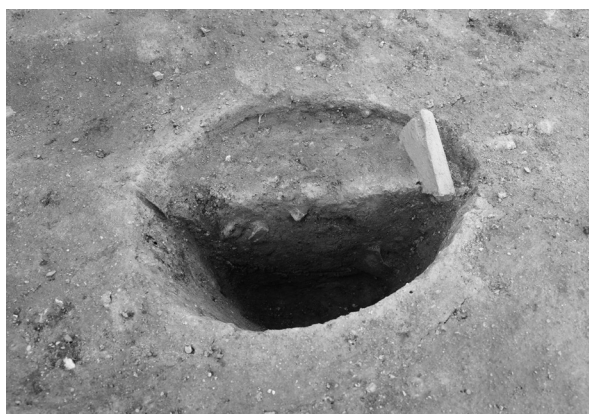
3. 2区東壁
(西から)



1. SX006 土層断面（西から）



2. SD014・016 土層断面（西から）



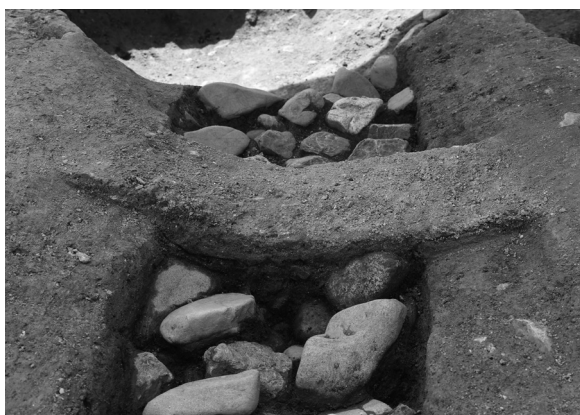
3. SP011 土層断面（南から）



4. SD015 土層断面（西から）



5. SP012 土層断面（南から）



6. SD016 土層断面（西から）



7. SP018 土層断面（南から）



8. SX021 土層断面（南西から）



1. SD005 内出土軒丸瓦（北西から）



2. SD005 内出土軒丸瓦（北西から）



3. SX006 内出土軒平瓦（北から）



4. SX010 完掘（北から）



5. SX006・SP011～013 完掘（西から）



6. SD014 完掘（南から）



7. SP020 完掘（東から）



8. SP018 完掘（南から）



1. SD016 完掘 (南西から)



2. SD016 完掘 (西から)



3. SD016 完掘 (北西から)



4. SX021 完掘 (北東から)



5. 1区遺構完掘 (西から)



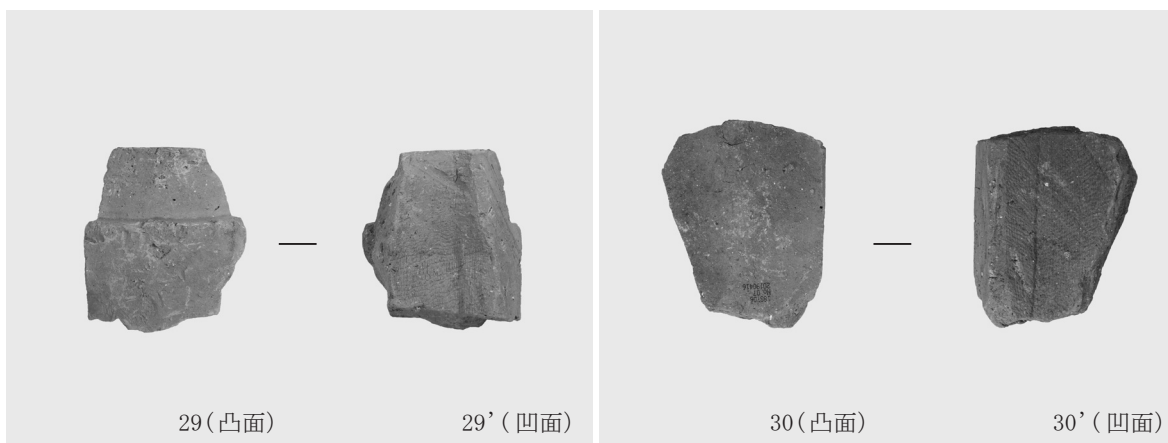
6. 2区遺構完掘 (西から)



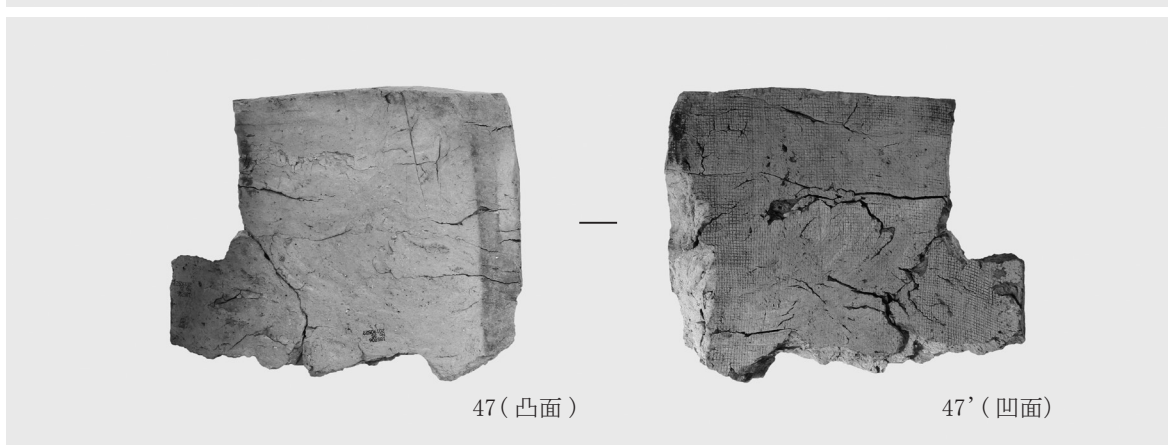
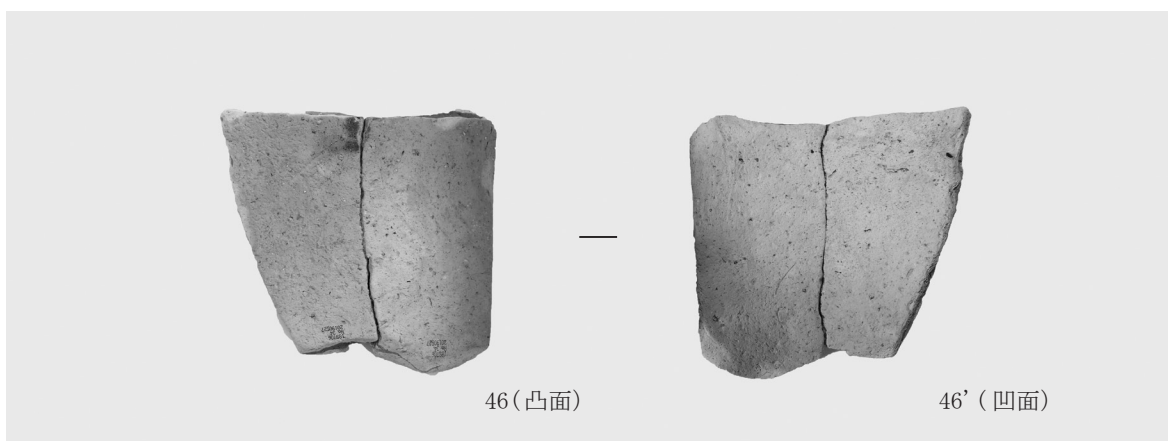
軒丸瓦 (16 ~ 21)、軒平瓦 (3・4)



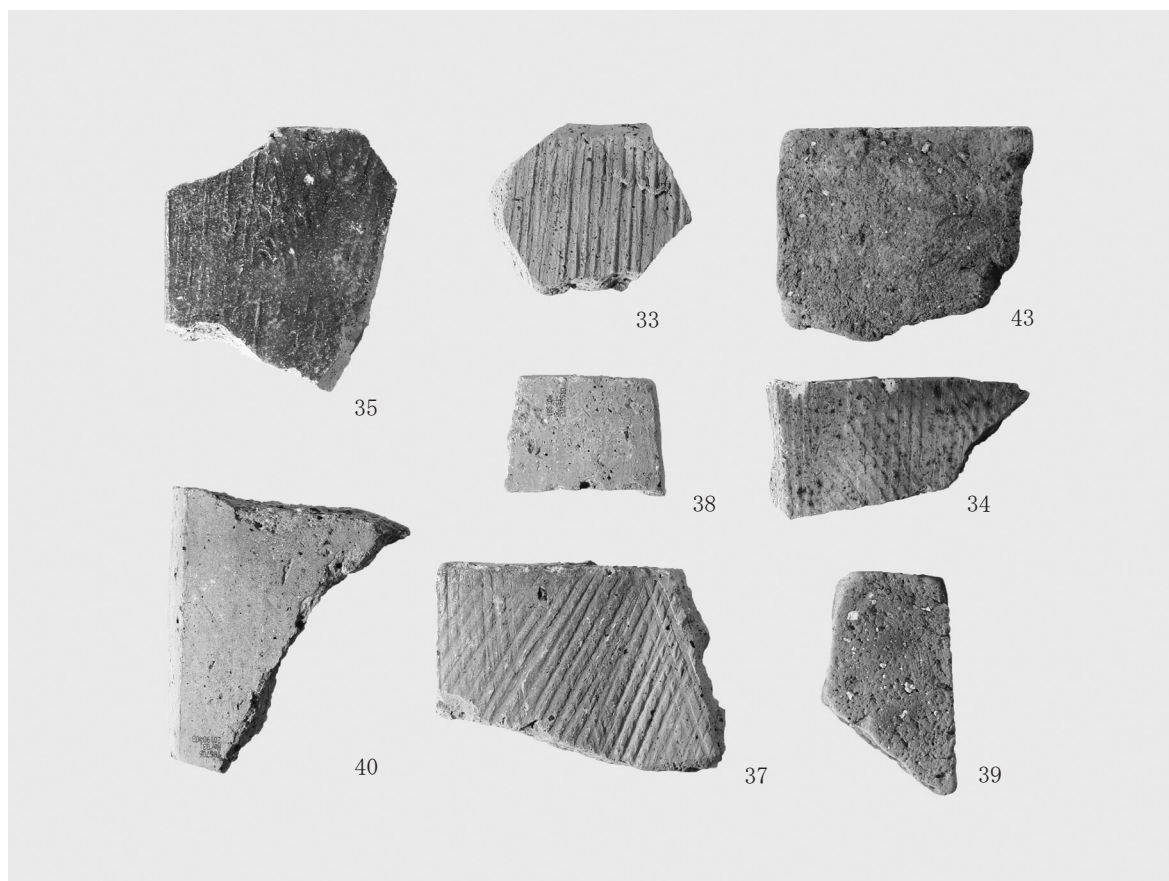
軒平瓦 (2・22 ~ 27)、丸瓦 (5)



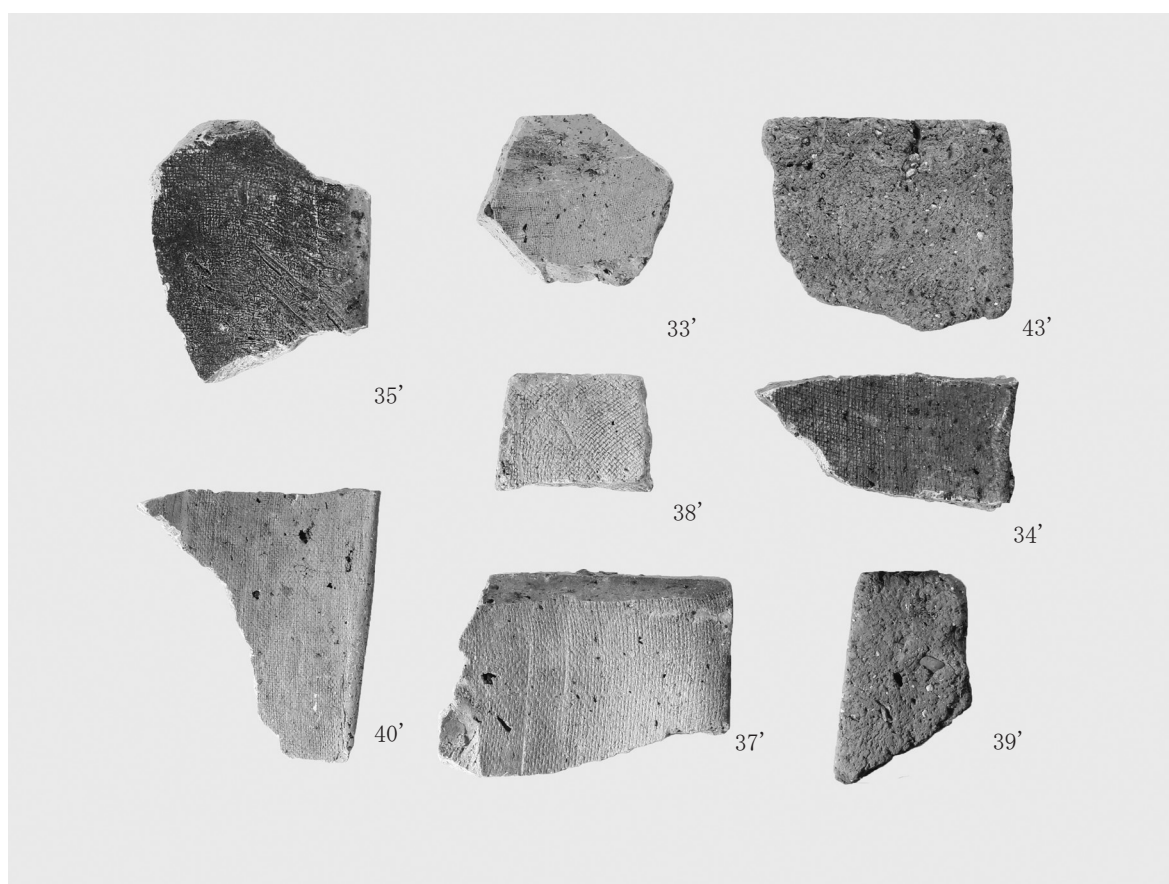
軒丸瓦 (29 ~ 32)



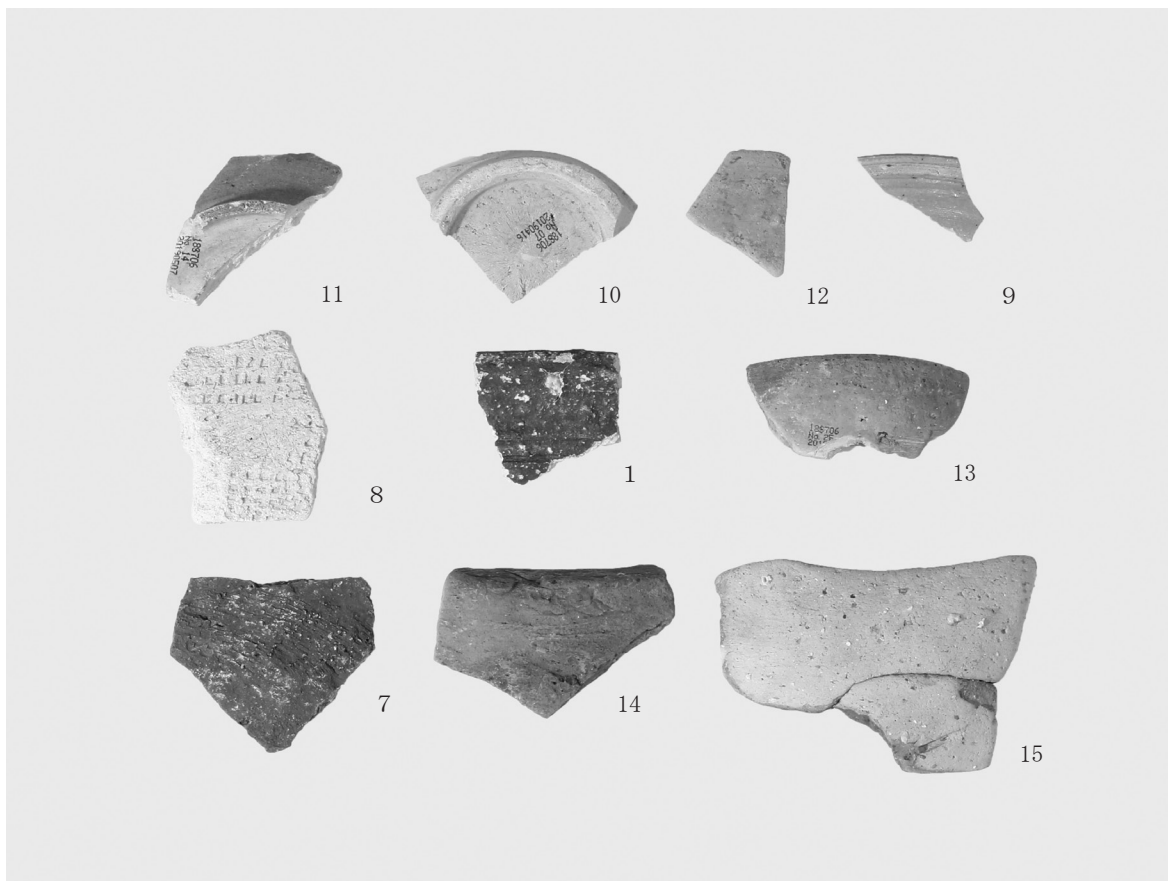
平瓦 (46・47)



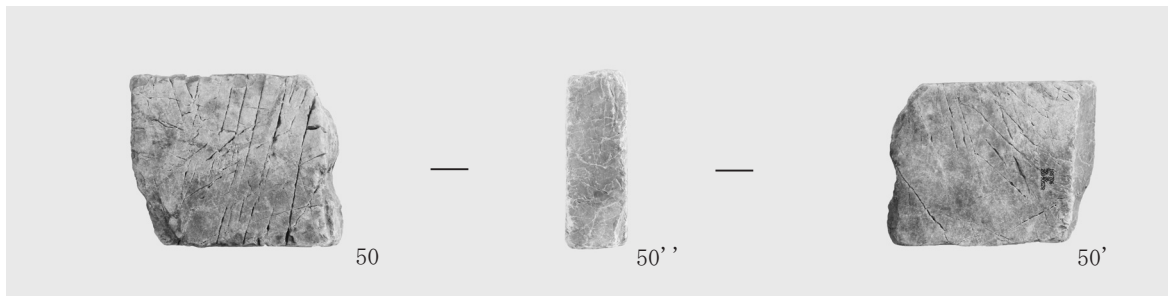
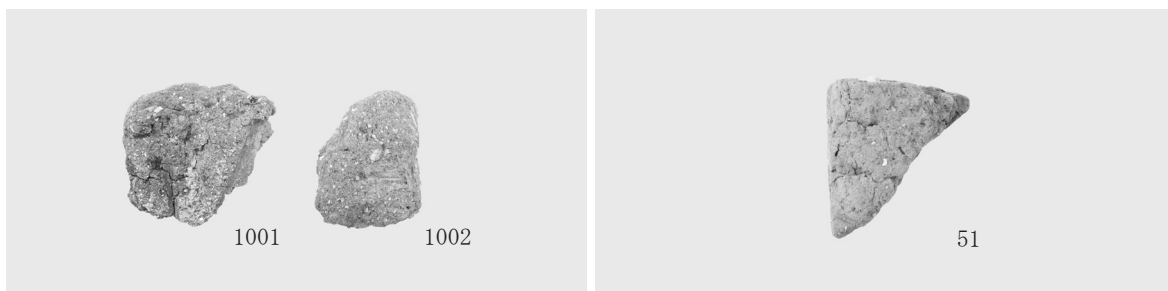
平瓦 凸面 (33 ~ 35 · 37 ~ 40 · 43)



平瓦 凹面 (33 ~ 35 · 37 ~ 40 · 43)



弥生土器壺 (15)・土師器皿 (13)、火舎 (14)・須恵器甕 (8)、杯蓋 (12)・陶器鉢 (1・7)・灰釉陶器碗 (9・11)・白磁碗 (10)



壁材 (1001・1002)・埴 (51)・砥石 (6・48～50)

報告書抄録

ふりがな	しょうかくじあとはくつちようさほうこくしょ							
書名	正覚寺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	福永信雄 市田英介 松田直子 影山美智与 江崎周二郎							
編集機関	株式会社 地域文化財研究所							
所在地	〒578-0941 大阪府東大阪市岩田町1丁目17番9号 TEL 072-968-7321							
発行年月日	令和元年(2019)11月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうかくじあ と 正覚寺跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 ふかくさしょうかくちよう 深草正覚町 7-3、32-8 各一部	26109	1115	34度 58分 19秒	135度 46分 20秒	平成31年 4月3日～ 令和元年 6月6日	約280.8 m ²	集合住宅 建設工事
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しょうかくじあ と 正覚寺跡	集落・ 生産域	室町時代 以降	土坑・溝	土師器、陶磁器、瓦、 石器				
	社寺跡	平安時代 後期	ピット、土坑、 溝、礎石建物	土師器、瓦				

正覚寺跡発掘調査報告書

令和元年11月1日発行

編集・発行 株式会社 地域文化財研究所
〒578-0941 東大阪市岩田町1丁目17番9号
TEL 072-968-7321

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所